

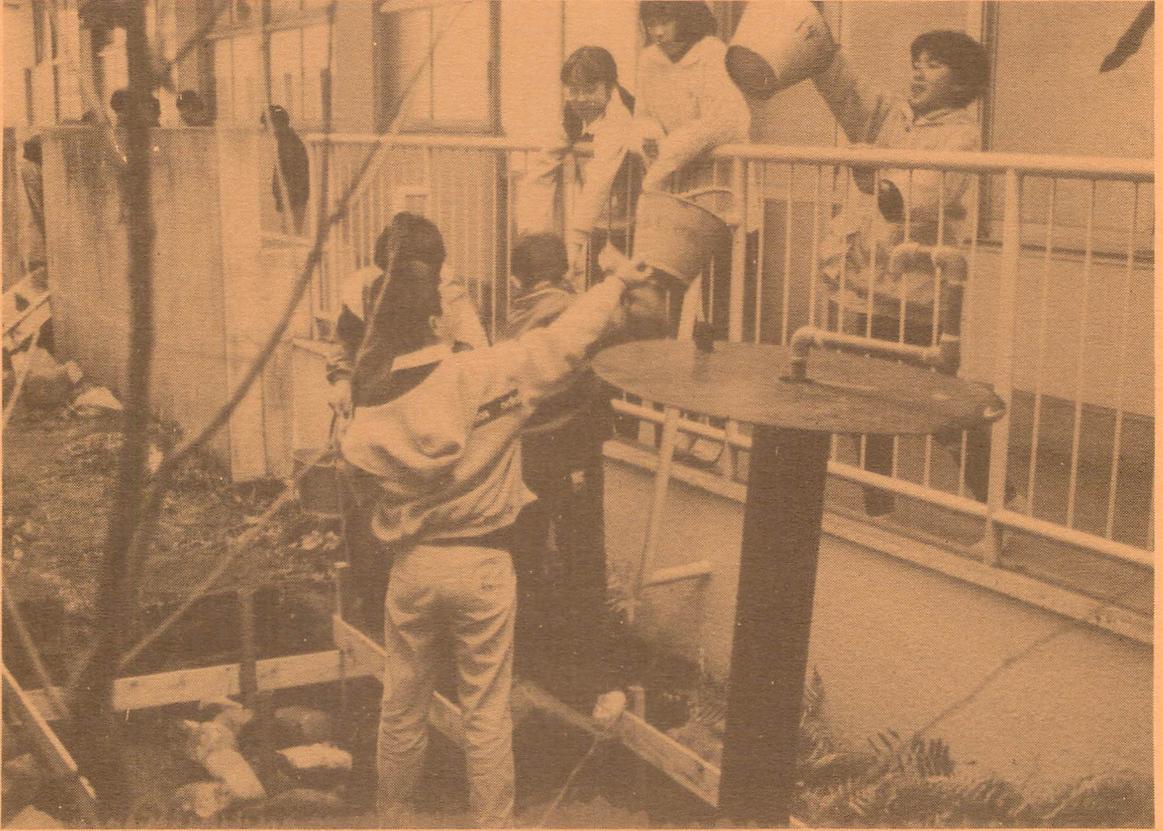
46号

# 愛鳥教育

1995. 5



全国愛鳥教育研究会



秦野市立南小のミニサンクチュアリ作り

## 愛鳥教育 No.46 1994.5

### 目 次

巻頭言 ----- 江袋島吉	3	座談会	
冬季研修会報告		1992年度版小学校理科教科書と愛鳥教育 -----	22
バード&ネイチャーウォッチング		鳥たちの街ものがたり—PART 1—	
in 多摩川 ----- 小野紀之	4	都鳥のもうひとつの顔は	
実践報告		「白カラス」 ----- 杉浦嘉雄・佐々木晶子	26
鳥・自然とのふれあい ----- 谷 淳司	11	論説 ----- 平田寛重	28
実践講座		平成5年度事業報告 -----	29
ネイチャーゲームと		夏期研修会の御案内 -----	30
バードウォッチング ----- 杉浦嘉雄	18	編集後記 -----	31
愛鳥活動のヒント		愛鳥クイズ -----	32
自然教材の工夫			
スライドボックス ----- 渥美守久	20		

## 巻頭言

# 圏央道建設に揺らぐ関東唯一の越冬地江戸崎

## 天然記念物 ヒシクイの里を訪れて

会長 江袋 島吉

“なぜ、私たちをこんなにいじめるのですか。私たちは、遠い北の国から渡って来たガンの一種オオヒシクイです。今、茨城県稲敷郡江戸崎町という所に住んでいます。

人間が引舟地区と呼んでいる湿田は私たちのえさ場ですが、食事をしていたら猟銃で脅かされました。やむを得ず禁猟区だといわれる稲波地区の湿田（干拓水田）にいて食事をしていたら、人間が放し飼いにしている犬に襲われました。そのあたりには「この付近は関東地方では珍しい鳥ヒシクイの越冬地になっています。犬を放したり近づいておどしたりしないようにしましょう。」と書いた立て看板があります。（県・町・猟友会）

また、近くの川はまぶしくて水面に降りられず、眠ることもできません。公園を造って一晩中照明しているからです。人間は圏央道という高速道路を造りたいために、私たちを追いほらおうとしています。でも野生動物にも生存権や自然享有権があります。”（年度初頭の某新聞投書欄所見）

地図で見ると、霞ヶ浦西南部の流入河川小野川の左岸にある江戸崎町は、関東唯一のガンの越冬地となっている。（昭和60年に36羽が再渡来して以来、年々個体数が増え、今冬はヒシクイ58羽、マガン6羽、計64羽を観測。）

ちょうどこの時期にあたる昭和64年に、首都圏中央自動車道（高速道路・略称圏央道）建設の基本計画が決定され、そのルートが二つあるえさ場の一つ引舟地区を通ることとなっていた。その際、建設省と県はルート上のヒシクイの存在には触れず（故意に無視？）にアセスメントの縦覧を行ったため、自然保護団体等からその不備を指摘されて、平成3年以来凍結状態にあった。

この間の事情については、日本鳥類保護連盟の機関誌“私たちの自然”No.364（平成4年3月号）に、小生が“圏央道建設に揺らぐ・天然記念物ヒシクイの里・関東唯一の越冬地江戸崎”という題で、キャンペーンを行っているだけに、その後の情勢の変化について、無関心で過ごすわけにはいられなかった。

その後、平成5年に事態は急激な進展をみせ、11月には突然“ヒシクイ保護対策委員会”が設置され、平成6年には、ヒシクイの存在を無視した計画が可決された。

その折も折、この投書であるが、これはヒシクイの言い分を代弁した形で、東京の高校の先生が書かれたものである。その内容に触発された私は程なくして現地を訪れることとなった。

現地へ来て驚いたことは、町の発展は圏央道の建設にありとする心なき一部の住民と、利権業者集団によるやらせらしき仕事が多いことである。投書にも見られる猟銃や犬による威嚇、夜間照明による着水の妨害、その他発動機付きパラグライダーによる音と姿、夜間、ヘリコプターによる騒音と照射、水上バイクの爆音等々、まさにヒシクイ追い出し作戦の全面的展開である。こんなことが行われてよいものだろうか、悲憤やる方なし。

元来、JRの各駅からは隔絶され、陸の孤島的な感じが強い町にとり、高速道路の開通は垂涎の的であろうが、失われた自然の重みというものについて、もう一度思いを致してもらいたいものだ。

そんな中であって、幾つかの自然保護団体の方々が、献身的な努力をされていることに対しては、頭の下がる思いでいっぱいだった。

このように、常識では考えられないような異常事態が次から次へと起こったことは、ヒシクイの行動パターンにも大きな変化を及ぼし、従来は昼間湿田で稲穂をついばんでいたものが、毎朝9時過ぎになると、緊急避難場所としていた霞ヶ浦の大山沖に行ってしまう、夜にならないと帰って来ないとのことでした。

このように、異常な事態の連続からくる緊張感やストレスと、何もしない保護行政により、ヒシクイは今やまったく居場所を失い、転々とする状況が続く、越冬地を放棄するのではないかと心配されています。“持続可能な開発”とか“人間と自然との共生”とかいう美辞麗句が空しく響く昨今ですが、来冬もヒシクイが訪れんことを……。

※ 江戸崎は、私が小学校時代を送った土地です。

冬期研修会報告

# バード&ネイチャーウォッチング in 多摩川

(財)せたがやトラスト協会 野鳥ボランティアリーダー 小野 紀之

平成6年12月10日、土曜日。早朝の寒風も集合時刻の9時15分にはすっかり治まって、絶好の野鳥観察日和となった。今年で3回目を迎える(財)せたがやトラスト協会主催の大バードウォッチングに、今回は(財)日本鳥類保護連盟とともに全国愛鳥教育研究会も後援として参加。冬期研修会として会員の参加を呼びかけた。

当日の報告とともに、社会教育活動として、愛鳥教育活動にも積極的に取り組んでいる(財)せたがやトラスト協会の活動を紹介することにする。

(財)せたがやトラスト協会のある東京都世田谷区は、樹林地や湧水地などに代表される自然環境や、世田谷の昔を伝える歴史的・文化的環境が比較的良好な状態で残されている数少ない地域のひとつである。

この環境という大切な財産を守り、次の世代に引き継いでいくためにはどうしたらよいのか。大都市東京にあって、この難しい課題と取り組んでいくために、せたがやトラスト協会は、区民ひとりひとりに、今残されている自然・歴史的環境の重要性を理解し、これらを自発的に守り育ててもらうための活動を行っている。しかし、まだ十分な活動経験のない都市部でのナショナル・トラスト運動には、解決しなくてはいけない問題点も山積みされている。例えば、「みどり」や歴史的遺産を保全するために土地を買い取るにしても都市部においては、もはや不可能にちかい状態にある。

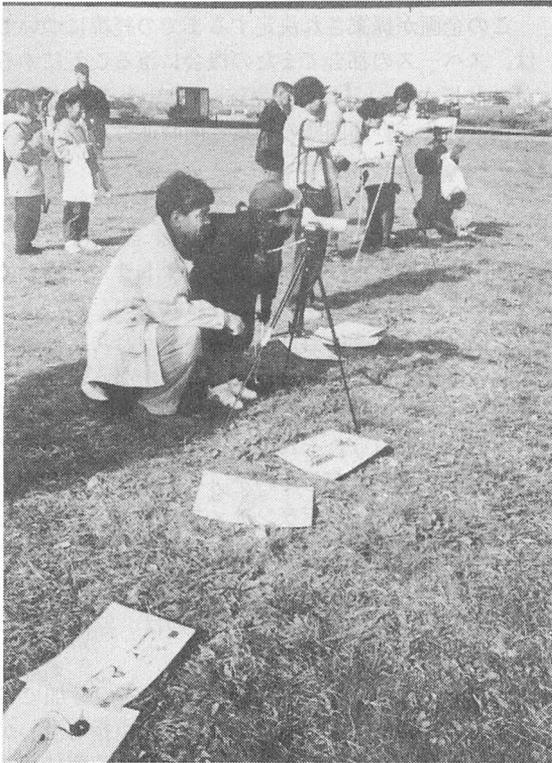
このような都市のトラスト運動の限界に対して、区民ひとりひとりへの啓蒙活動という地味で、時間がかかるけれども、確実に一步一步み続ける道を選択したようである。

平成元年10月に財団法人として本格的な活動を開始して以来、会員数も順調に伸び、12月末現在約5,500名が登録されている。その大半はもちろん世田谷区民だが、北海道から九州にいたる全国の人が2割を占めているのは、この都市部におけるトラスト運動への関心の高さを示しているのではないだろうか。

現在、「イベント事業と出版の連係による活動」と題して、区民にメディア(仲介人)になってもらう企画を推進している。イベント参加者の意見を参考にしてつくられた出版物、その出版物を手にして新たにイベントに参加してくる区民。この繰り返しによって、活動の輪は確実に広がっている。



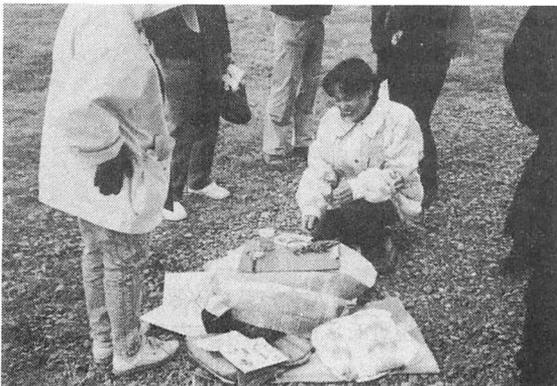
今回の『バード&ネイチャーウォッチング』には、約700名の参加があった。2年前に行われた第1回の参加者が800名、昨年(平成6年)の第2回が600名。いずれもがこの種のイベントとしてはあまり例をみない大規模なものである。今年行われた第3回の大きな特徴は、従来、バードウォッチングだけだったものにネイチャーゲームの手法を新たに取り入れたことだろう。そして観察対象も野鳥のほかに、植物や環境への関心を高めるために水質、ゴミなども加えている。



スタッフの企画意図としては、今、子供が夢中になっているコンピューターゲームの手法で、ビンゴカードとポイントマップをもとに、ミニ野鳥図鑑、植物手帳、ゴミ回収袋などのツールを持って、野外のステージをクリアしながら自然を楽しんでくれば、と考えていたようである。

観察ポイントでのビンゴクリアのためのアドバイスしてくれる指導員は、すべてボランティアのメンバーがあたっていた。

このボランティアについては、この大がかりなイベントが成功できた重要なキーポイントでもあるので、説明を加えることにする。



4年前、わずか5人の参加者ではじめられた野鳥観察会。場所は、今回の会場でもある多摩川河川敷・兵庫島河川公園である。あくまでも身近な自然、地域の自然にこだわっている姿勢がうかがわれる。のちに「野鳥ボランティア」と呼ばれる指導員養成プログラムのスタートである。

都会の中では比較的自然が豊かだと言われている場所だが、やはり観察される野鳥には限りがあった。しかし、それを逆手にとって、種類を多く見るのではなく、じっくり見ることに重点を置いていた。

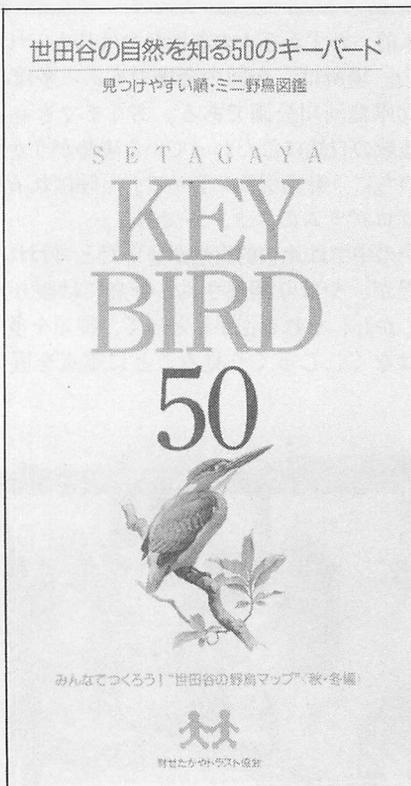


最初のころはいつも、コサギとダイサギ、ハクセキレイとセグロセキレイ、カルガモとオナガガモといった普段よく見られる野鳥の、違いを見つけることから繰り返し練習した。その甲斐あってか、1年を過ぎるころには、なにも教えなくても自分でその野鳥の特徴を見つけて、識別してしまうまでになっていた。「見かた」の指導に徹した成果である。

このころになると常連の参加者が20~30名に落ち着いてきた。定例会以外でも日常生活のなかで野鳥を観察している様子が聞かれるようになったのもこのころからだった。

そこで、せたがやトラスト協会のスタッフは、比較的野鳥観察のしやすい秋から冬の時期に水辺の鳥の調査を定例会参加者を中心に行った。この調査は平成3年9月に開始された。そして、この結果をもとに翌平成4年11月、「せたがやキーバード50」を誕生させることになった。

バードウォッチングというイベント参加者が、いつか調査員となり、その結果をミニ野鳥図鑑という形で出版し、新たな参加者のために役立ったわけである。



ここで特に注目してほしいことは、ミニ野鳥図鑑を単に出版して、配布することだけに留めておかなかった点である。区民自身による調査という点でこの事業は確かに画期的だが、この手のパンフレットは、すでに多くの区市町村で発行されている。しかし、そのほとんどが役所の窓口や住民の家の本棚で大掃除の日を待っているだけだろう。そこで、せたがやトラスト協会は、せっかく作ったものだから、みんなに配って、必ず1度は使わせてしまおう、という使い方まで面倒をみてしまったのである。

『1,000人バードウォッチング』……とんでもない発想である。

この企画が提案され決定するまでの経緯については、スペースの都合でまたの機会に譲ることにするが、とにかく、『1,000人バードウォッチング』の準備は、ミニ野鳥図鑑の編集と同時進行という形ですすめられたのである。

平成4年12月12日、第2土曜日。設立後、やっと3年を経過したばかりのせたがやトラスト協会にとってこの日は、どう位置づけられていたのだろうか。協会スタッフは当日、会場となった兵庫島河川公園の安全対策に専念していた。いかなる場合にも安全がすべてに優先することは、いまさら言うまでもないことだろう。それでは、バードウォッチングの指導は一体だれがしたのか。もちろん定例会のメンバー、つまり野鳥ボランティアリーダーたちである。いくら調査員を経験したとはいえ、ごく普通の主婦を中心とするメンバーの人たちに、指導員、それも1,000人規模の指導をさせるのは、無謀と思われる方がほとんどだろう。

リハーサルは、下見を兼ねて約20名の参加で12月3日に行われた。指導方法は、「定点指導型」が採用された。この方法の利点は、指導する側にとって、経験の少ない人でもやりやすいこと。また、参加する側には、自由に観察が出来るので、小さい子供を連れた親子でもまわりの参加者への迷惑をあまり気にしなくて済み、参加しやすいことにある。

あらかじめ観察ポイントとなる場所にボランティアリーダーたちは配置され、リーダーはそこで観察できる野鳥に注意を集中していればよい。参加者たちは、自由にそれらのポイントを回って、観察できるわけである。リーダーは、あくまで観察の手助けをする人であり、主役は野鳥と参加者だ。もともと野鳥の名前なんてあまり知らないけれど、自然が好きの人が定例会を通じてリーダーになったわけだから、野鳥以外の知識に長けた人も多く、広い視野での観察も出来た。このことは些細なことかもしれないが、初心者や特に子供を対象にする観察会では大切なことだ。リーダーと参加者が常に同じレベル、同じ視線にたつて自然を楽しむ。指導なんてはじめてのリーダーたちにとって、そんなことを意識する余裕すら当日はなかったことだろう。しかし、まさに素人からのリーダー育成だったからこそ、遊び感覚でのスタートだったからこそ、喜びを参加者と分かち合え、視野を広げていけるのではないだろうか。

このようにして第1回の大バードウォッチングは、晴天に恵まれ、親子約800名の参加で終えることができた。カワセミ、カルガモ、オナガガモ、そしてそれらの野鳥たちの愛くるしいしぐさなどをゆっくり観察し、楽しんでいた。近くで野球やサッカーに興じていた親子もいつしか参加して、普段あまり見ることのなかったグラウンドのまわりに、多くの野鳥たちがいることを知ってくれたことは、大きな成果だった。

### みんなで作る

### 『せたがや 水辺の野鳥マップ』

東京都世田谷区「水辺の野鳥分布概要調査報告書」

～平成4年度 秋・冬編～



(財) せたがやトラスト協会



野鳥に続いて昨年4月からは、植物のボランティアリーダー育成のための活動が新たにスタートした。これも区民の積極的な参加によって支えられているわけだが、野鳥ボランティアと両方に参加している人も多い。

活動をはじめて3か月後の6月に行われた兵庫島河川公園での植物観察会の参加者募集には、すぐに160名の応募があった。残念ながら観察会当日は天候が思わしくなく120名の参加に終わった。しかし、この点に関してスタッフは、「4、5年前なら、区報を通じて呼びかけても10～20名の参加者を集めるのがやっと。やはり参加者自身による呼びかけが最も効果があったのでしょうか。」と分析している。また、「子供から高齢者までの幅広い参加

は、自然観察の枠を越え、世代をも越えたコミュニケーションの場をそこにつくりだしている。」と語っていたのが印象深い。

この植物ボランティアリーダーは、野鳥ボランティアリーダーが「遊び心」から気軽に自然発生的にスタートしたのに対して、はじめから専門家の講師を交えて「セミナー」としてスタートしている。この活動の形の違いにも、先駆者として都会型トラスト運動の在り方を模索する(財)せたがやトラスト協会のチャレンジ精神が感じられて頼もしい。

昨年12月11日に行われた第2回の大バードウォッチングには600名が参加した。ボランティアリーダーたちもすっかり自信をつけていた。しかし、彼らや彼女たちがあくまで遊び心にこだわってくれたことは、なによりの喜びだった。指導することより一緒に楽しむことを忘れない姿勢。それがボランティアリーダーたちの活動の原点なのかもしれない。

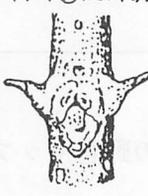
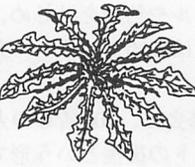
このように多くのボランティアスタッフに支えられて第3回を迎えることができた今回の『バード&ネイチャーウォッチング』では、野鳥ボランティアを中心にされる野鳥観察に加えて、植物ボランティアによる植物観察、そして、多摩川をフィールドとして環境保全のための啓蒙普及活動が続いている二子玉ネットのボランティアメンバーらによる水質検査やゴミ回収作業などをビンゴゲームとして取り入れて行われた。縦横各5マス、計25マスにさまざまな野鳥や植物の特徴、環境保全のためにできる身近なことが描かれたビンゴカードが参加した大人や子供全員に配られ、それぞれが思い思いのポイントに散って行った。

11か所の観察ポイントには、約40台の望遠鏡が用意され、ユリカモメ、カルガモ、カワセミ、そしてチョウゲンボウなどを観察。植物のポイントでは、虫メガネを使ってニセアカシアの葉が落ちた跡に見られる顔模様などを観察して楽しんでた。また、ゴミ回収では、ビニールや釣糸をはじめ、たばこの吸い殻の多さに参加者は改めてマナーの悪さを実感したようだ。

このようにして冬期研修会は、700名もの人たちが参加する自然観察イベントの後援という形で、会長はじめ会員の参加を得て無事終了することができた。

# 🐦 ネイチャービンゴ 🐦

みなさんは、「ビンゴゲーム」って知っていますよね！四角のマスの中に番号が書いてあるカードをもらい、発表された番号に印をつけて、一本の線になったところで「ビンゴ！」と言うゲームです。このネイチャービンゴは、番号の代わりに書いてある鳥や植物などを探して、名前を書きこむ“自然版ビンゴゲーム”です。自然ウォッチングを楽しみながら、マスの中をうめて、最終チェックポイントにもどって来て下さい。

B	I	N	G	O																		
 <p>黄色いくつをはいてるよ！</p>	<p>小さなハヤブサの仲間！</p> 	<p>👤👤 自然へのマナーの話をよく聞いてください！</p> 	<p>ポイント⑩にヒトあり</p> 	 <p>ドバトとはちがうよ！</p>																		
 <p>ピーヨ〜ピーヨとよく鳴くよ！</p>	<p>ポイント②にヒトあり</p> 	<p>よく群れて飛んでるよ！</p> 	 <p>体もようが若鳥と違うよ！</p>	<p>ポイント②にヒトあり</p> 																		
<p>🐦 鳥が水浴びしている所を見つけよう！</p>	<p>ポイント⑦にヒトあり</p>  <p>兵衛鳥が一番多いのは？</p>	<p>ポイント⑩</p> 	<p>かがやく青い背中が目印！</p> 	<p>尾がピン！としています</p> 																		
<p>しっぽをよくふるよ！</p> 	<p>⑩ 水質チェック 多摩川/野川</p> <p>ポイント⑨</p> <table border="0"> <tr><td>気温</td><td>/</td><td>℃</td></tr> <tr><td>水温</td><td>/</td><td>℃</td></tr> <tr><td>PH</td><td>/</td><td>mg/l</td></tr> <tr><td>NO</td><td>/</td><td>mg/l</td></tr> <tr><td>COD</td><td>/</td><td>mg/l</td></tr> <tr><td>NH</td><td>/</td><td>mg/l</td></tr> </table>	気温	/	℃	水温	/	℃	PH	/	mg/l	NO	/	mg/l	COD	/	mg/l	NH	/	mg/l	<p>オレンジの口と足に注目！</p> 	<p>皇居の〜カモで有名？</p> 	<p>ポイント⑨にヒトあり</p> 
気温	/	℃																				
水温	/	℃																				
PH	/	mg/l																				
NO	/	mg/l																				
COD	/	mg/l																				
NH	/	mg/l																				
<p>ポイント⑩にヒトあり</p> 	<p>小さいけれど子どものカモではない！</p> 	<p>ポイント⑤にヒトあり</p> 	<p>🐦 鳥が食餌を食べている所を探そう！</p>	 <p>長い首のカラスよう！</p>																		

👤 財団法人せたがやトラスト協会

## 🐦 ネイチャービンゴ解答集 🐦

さて、あなたはいくつ“ビンゴ”が出来ましたか？解答集と答えをあわせてから、あなたができた“ビンゴ”を数えてトラスト多摩川ネイチャー度をチェックしてください！

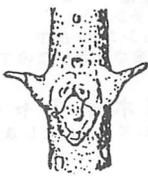
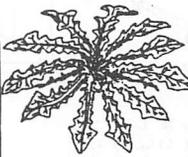
0～3 ⇒ 初級（ジュニア）レンジャー

4～6 ⇒ 中級（サブ）レンジャー

7～9 ⇒ 上級（チーフ）レンジャー

9～12 ⇒ 最上級（スペシャリスト）レンジャー

※認定証の空いている所に“ビンゴ”の数をチェックして書き入れてください。

B	I	N	G	O																		
 <p>黄色いくつを はいてるよ！</p> <p>◀ コサギ ▶</p>	<p>小さなハヤサ の仲間！</p>  <p>◀ チョウガンボウ ▶</p>	 <p>自然への マナー の話をよく聞いて ください！</p> <p>◀ ○ - × ▶</p>	<p>ポイント⑩にヒトあり</p>  <p>◀ ニセアカシヤ ▶</p>	 <p>ドバトとは ちがうよ！</p> <p>◀ キジバト ▶</p>																		
 <p>ピーヨーピーヨー とよく鳴くよ！</p> <p>◀ ヒヨドリ ▶</p>	<p>ポイント②にヒトあり</p>  <p>◀ センダン ▶</p>	<p>よく群れで 飛んでるよ！</p>  <p>◀ ユリカモメ ▶</p>	<p>体のもようが 若鳥と違うよ！</p>  <p>◀ ゴイサギ ▶</p>	<p>ポイント②にヒトあり</p>  <p>◀ アレチウリ ▶</p>																		
<p>鳥が 水浴び している所を 見つけよう！</p> <p>◀ ○ - × ▶</p>	<p>ポイント⑦にヒトあり</p>  <p>アメリカセンダングサ コセンダングサ</p> <p>◀ ▶</p>	<p>ポイント⑩</p>  <p>◀ タバコの吸い殻 ▶</p>	<p>かがやく青い 背中が目印！</p>  <p>◀ カワセミ ▶</p>	<p>尾がピン！ としています</p>  <p>◀ オナガガモ ▶</p>																		
<p>しっぽをよく ふるよ！</p>  <p>◀ ハクセキレイ ▶</p>	<p>水質チェック 多摩川/野川ポイント⑨</p> <table border="1"> <tr><td>気温</td><td>/</td><td>℃</td></tr> <tr><td>水温</td><td>/</td><td>℃</td></tr> <tr><td>PH</td><td>/</td><td>mg/l</td></tr> <tr><td>NO</td><td>/</td><td>mg/l</td></tr> <tr><td>COD</td><td>/</td><td>mg/l</td></tr> <tr><td>NH</td><td>/</td><td>mg/l</td></tr> </table>	気温	/	℃	水温	/	℃	PH	/	mg/l	NO	/	mg/l	COD	/	mg/l	NH	/	mg/l	<p>オレンジの口と足 に注目！</p>  <p>◀ ムクドリ ▶</p>	<p>皇居の～ カモで有名？</p>  <p>◀ カルガモ ▶</p>	<p>ポイント⑧にヒトあり</p>  <p>◀ ハナシブクバネウツギ ▶</p>
気温	/	℃																				
水温	/	℃																				
PH	/	mg/l																				
NO	/	mg/l																				
COD	/	mg/l																				
NH	/	mg/l																				
<p>ポイント⑥にヒトあり</p>  <p>◀ タンポポ(ロゼット) ▶</p>	<p>小さいけれど 子どものカモ ではない！</p>  <p>◀ コガモ ▶</p>	<p>ポイント⑤にヒトあり</p>  <p>◀ ニシキギ ▶</p>	<p>鳥が 食餌を 食べている 所を探そう！</p> <p>◀ ○ - × ▶</p>	<p>長い首のカラスよう！</p>  <p>◀ カワウ ▶</p>																		

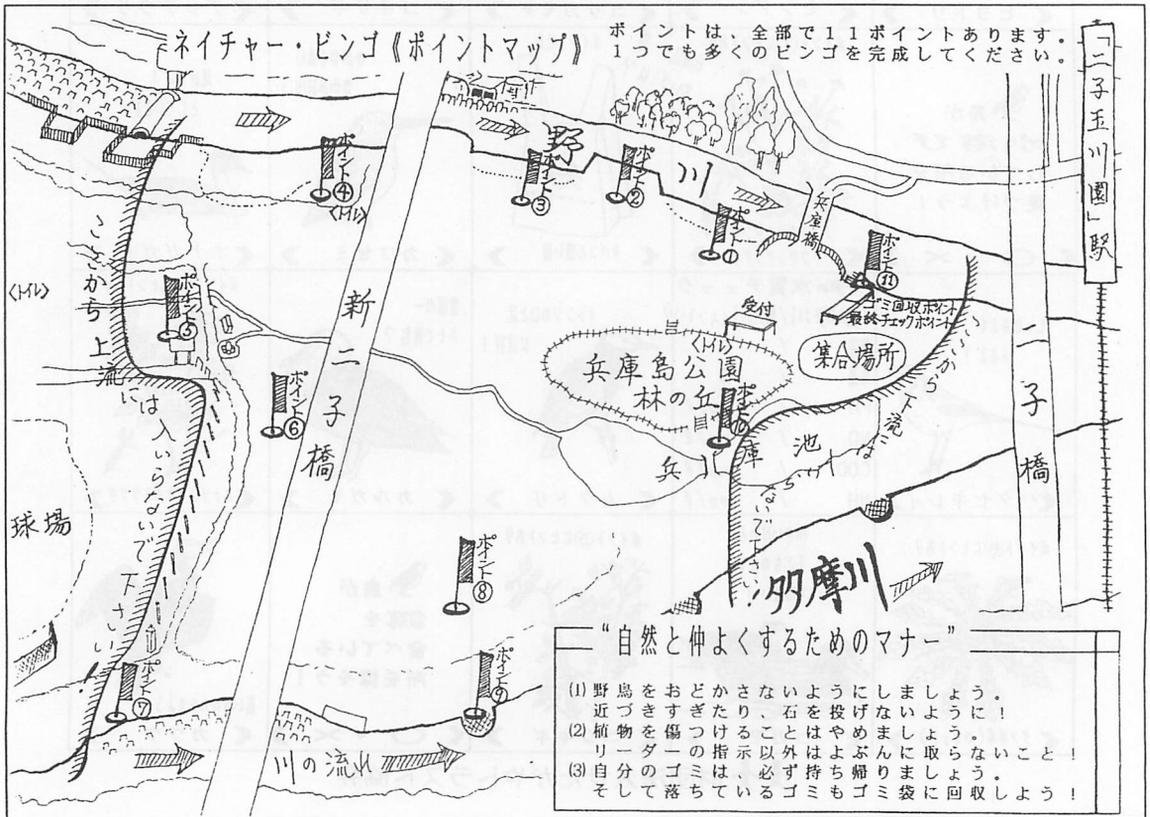
財団法人せたがやトラスト協会



当日使用したビンゴカード、認定証、ミニ野鳥図鑑などの資料については、直接、(財)せたがやトラスト協会に問い合わせさせていただきたい。

なお、1994年12月19日より下記に移転したことを付記しておく。

(財)せたがやトラスト協会  
〒157 東京都世田谷区成城6-2-1  
03-3789-6112  
03-3789-6114  
担当：杉浦



実践報告

鳥・自然とのふれあい

神奈川県秦野市立南小学校 谷 淳司

1 はじめに

丹沢、大山、渋沢丘陵などの山々に囲まれた秦野盆地。昨年4月に創立100周年を迎えた本校はその南部にあり、大正12年の関東大震災のおりに誕生した震生湖の東北約1に位置している。校庭の桜木は、「かながわ名木100選」に選定され、春の開花時期には子どもたちや地域の方々の心をなごませてくれている。

南小学校は、以前から神奈川県のアシモデル校に指定され、愛鳥活動の精神が引き継がれて今日に至っている。

平成5年度から秦野市の愛鳥モデル校として指定を受け、愛鳥活動は「花いっぱい運動」の栽培活動や飼育活動と併せて、学校経営の中にも位置付けられた。

2 愛鳥活動の概要

本校は、学校教育目標および経営の重点として、

「やすらぎ・ふれあい・感動のある教育環境づくり（自然や動植物とのふれあいによる自己の生き方の見直しと“花いっぱい”“緑いっぱい”“鳥いっぱい”の環境づくり、環境保全の推進）」を掲げている。愛鳥活動は、これに基づくものである。

平成5年度は、「親しむ・知る活動」に重点を置いた。平成6年度は、前年度の方針を継承しながら「広げる活動」も充実させ、児童の自然を見つめる目を育てていきたいと考えた。

愛鳥活動は、児童側では「愛鳥委員会」、教師側では「環境部」が中心になって推進している。

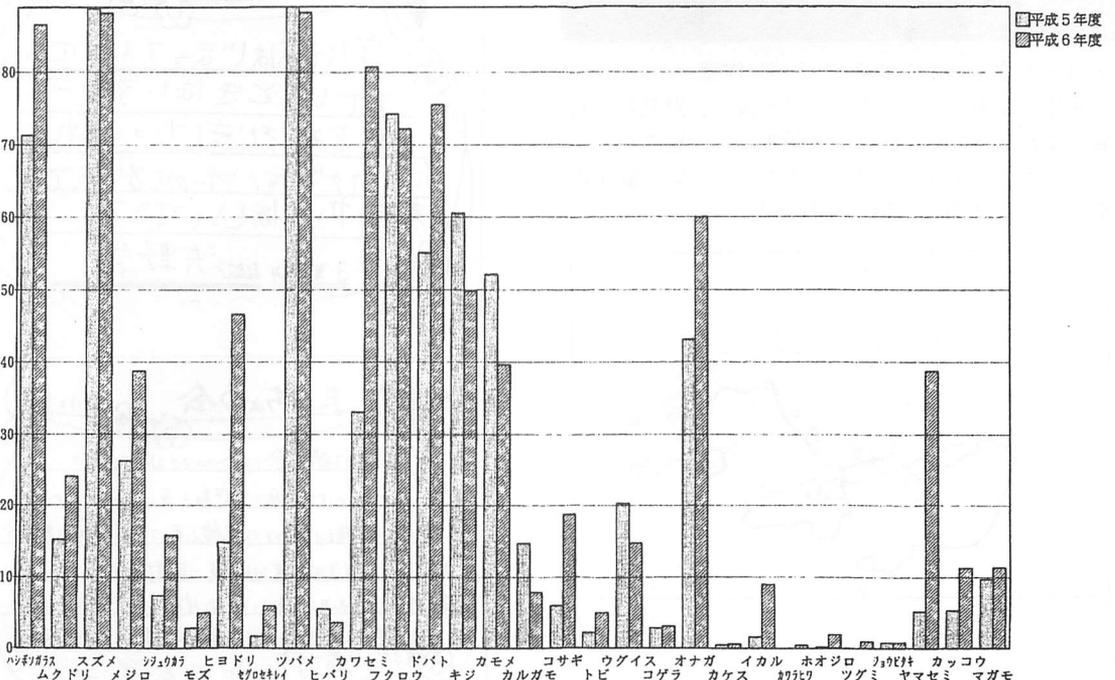
3 活動内容

◇全校野鳥アンケート

野鳥に関する児童の実態調査を行った。全校に野鳥の映像をビデオで流しながら、見たことがあるか（知っているか）、名前が書けるかという内容でアンケート調査を行った。低学年（1～3年、20種

(単位：%)

野鳥の名前が書ける



類)、高学年(4~6年、30種類)で行った。

5年度と比べると、6年度は野鳥への関心の高ま  
りが見られ、映像を見て名前が言える児童の割合が  
増えてきている。

【親しむ活動】

A. 児童が、野鳥観察を通して、自然に親しむ。

①探鳥会

11月と3月の年2回、探鳥会を行った。11月は  
ネイチャーゲームも併せて行い、3月は2コースで  
行った。

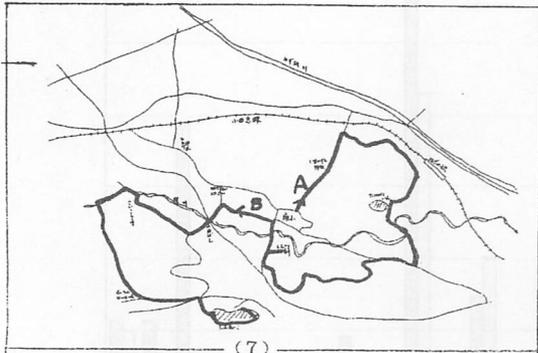
〔目的〕バードウォッチングを通して野鳥に親しみ  
をもち、自然とのふれあいを深める。

〔参加対象〕1年生から6年生(3年生以下は親子  
で)と父母

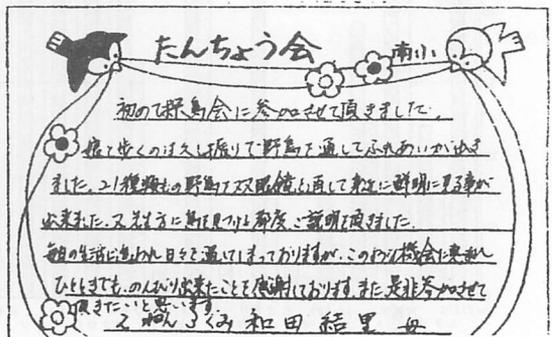
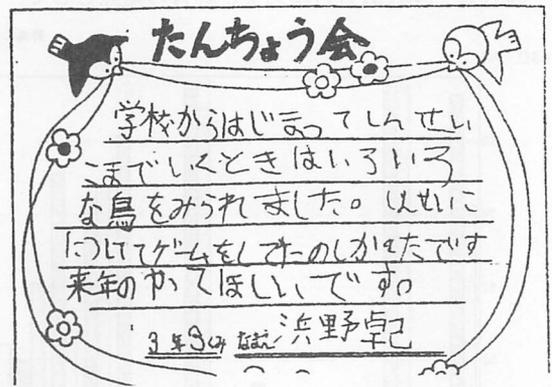


②バードウォッチング&クリーン作戦

6月には南小バードウィークを設け、野鳥の資料  
展示などを行った。併せて、学年毎に全校でバード  
ウォッチングを行い、フィールドにしている震生湖  
や近くの公園のごみ拾いを行った。

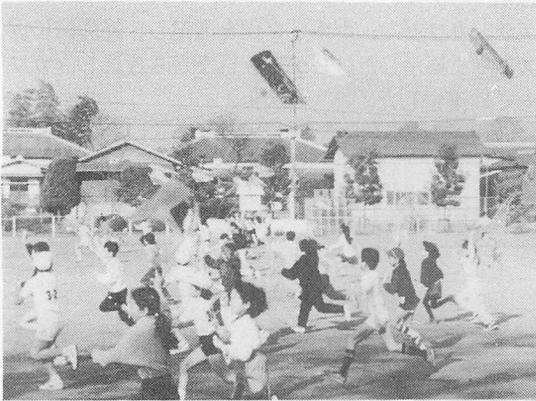


月	愛鳥委員会	自然科学クラブ	学年・学級	理科部
4	愛鳥カレンダー(毎月) 野鳥だより(毎月)			年間計画 野鳥アンケート
5	野鳥紹介 一分間探鳥 水質調査(11カ所)	探鳥 水質調査		
6	愛鳥マップ		野鳥となかよく	
7			実のなる木の 植樹	
8	水質調査 10分間探鳥			巣箱・給餌台 作り
9	水質調査 10分間探鳥			
10	巣箱作り 給餌台作り	探鳥		
11	野鳥紹介 野鳥クイズ 水質調査・10分間探鳥	探鳥 野鳥バッジ作り		探鳥会(ネイ チャーゲーム)
12	巣箱かけ 野鳥クイズ			
1	水質調査 10分間探鳥	探鳥	野鳥たこあげ	
2	野鳥クイズ		野鳥水飲み場 製作	
3				探鳥会





〔製作〕学級活動の時間に行った。  
 〔たこあげ〕学年集会の時に、学年ごとに行った。



- ⑤野鳥ブローチ作り  
自然科学クラブの活動として行った。
- ⑥野鳥の折り紙  
学年・学級の取り組みとして、1年生で行った。
- ⑦野鳥パズル  
学年・学級の取り組みとして、5年生で行った。
- ⑧野鳥新聞  
学年・学級の取り組みとして、4年生で行った。

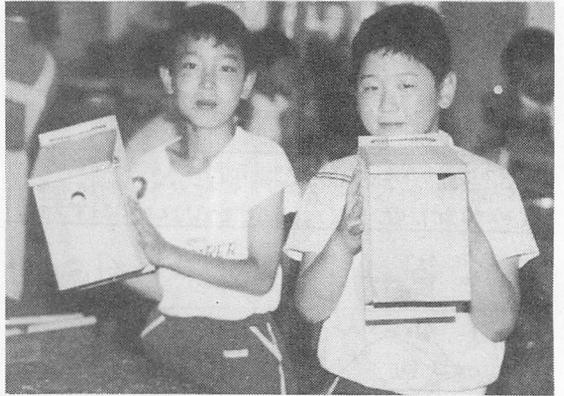
⑨野鳥紹介

児童集会でその時期に見られそうな野鳥の紹介を行った。

C. 家庭への普及活動

- ①野鳥だより
- ②給餌台・巣箱づくり

夏休みの午前中に行った。3年生以下は、親子で参加。材料費は実費(300円)とした。32名(大人8名)が参加し、巣箱19セット、給餌台16セットが完成した。



**養野市の鳥**

**ウグイス**  
問題  
この鳥はなにかい  
う名前でしょうか?

自然がたくさん  
のニッている所は  
鳥がたくさんくる  
うんだわ!

ホーホケキョ

●ウグイス  
ウグイスは、春の鳥で  
梅雨に入っている。ウグ  
イスが来たとき、ウグイス  
の鳴き声は、ウグイス  
の鳴き声と聞こえる  
という。

**野鳥新聞**  
高倉理志

栗民の森で 見られる鳥	しんせいで 見られる鳥	こうぼう山で 見られる鳥	本町・四ッ角で 見られる鳥
サンバ	イカル	アオバトク	ムクドリ
キビタキ	エナホ	メジロ	ヒヨドリ
コカラ	ウツ	カケス	ハシブトガラス
キジ	ヤマガラ	ジョウビタキ	キジバト
アカケラ	コケラ	オナホ	ツバメ
オオルリ	ウグイス	ツグミ	イワツバメ
アオハラ			ゴシヤカツバメ
ミツササギ			スズメ
カシラ			

アオハラ  
カシラ

ビってま  
い鳥がい  
いいる?

(44) 行けばめ  
か

324-1

# 野鳥だより

4月号

南小愛鳥委員会  
1993.4.30



## 南小のサクラの木

南小の校庭のサクラが満開のころ、いつもサクラの花の中でピーヨピーヨと大きな声を出して鳴いているのは、ヒヨドリです。双眼鏡で、よく観察してみると花を食しているように見えます。このヒヨドリが何をしているか観察してみてください。

## ヒヨドリ

全身は灰色でほかにかげ色のもようのある鳥。ヒヨヒヨと高く鳴くこと、砂を啄むこと、ヒヨドリの名がある。以前は山地から丘陵地、林ではんしくする鳥だったが、元々年々減少し、市が広い庭木やがけの斜面に巣を作る例が多くなり、現存しているのは、最もふつふつな市がけのりゅう鳥になった。はんしく期にはコガネムシのような大形のこん虫をよくとらえるが、秋冬には木の皮を好み、アオキやヒラカサの皮を丸のみにして、種子の運び手を助ける役わりもしている。



## 野鳥色ぬりカレンダー

三年生から六年生の各クラスに二まい、一二年生は全員に野鳥色ぬりカレンダーをくばりました。

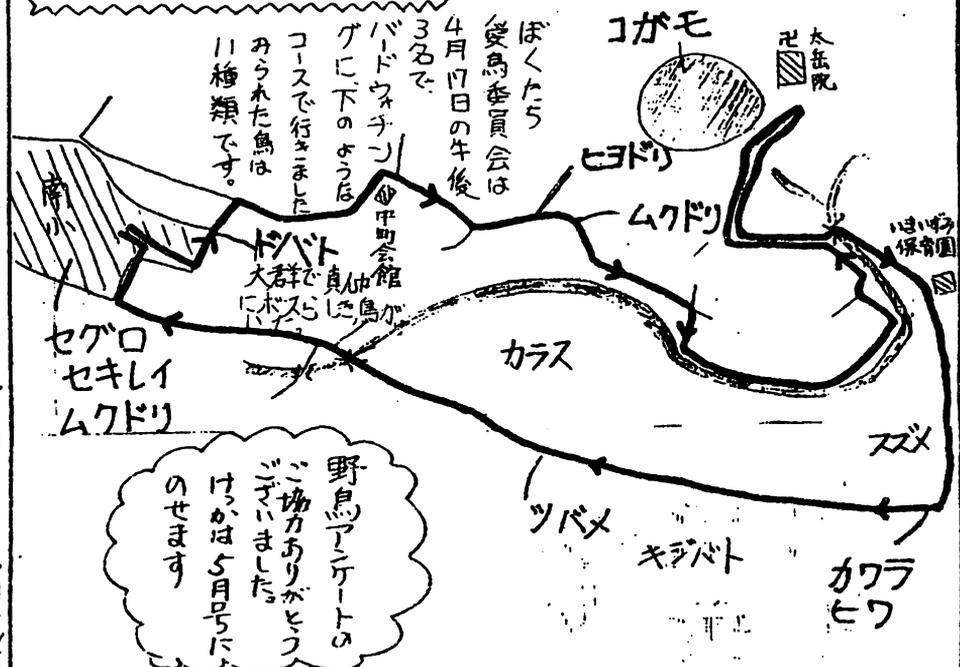


4月の鳥  
オナガ

ギョーイビロビロ

色ぬりカレンダーにはオナガが描かれています。

## バードウォッチングに行こう!



野鳥アンケートのご協力ありがとうございました。けっかは5月号にのせます。

鳥の体に、色のセフのいにしたがって色をぬって下さい。図かんなどをみると、もっとくわしく色がわかると思います。また、曜日の下に4月ですと、1より30の数字を日曜日は赤、土曜日は青というように入れて下さい。てま上がったものは教室にけいして下さい。

D. 野鳥誘致施設の充実

①給餌台設置

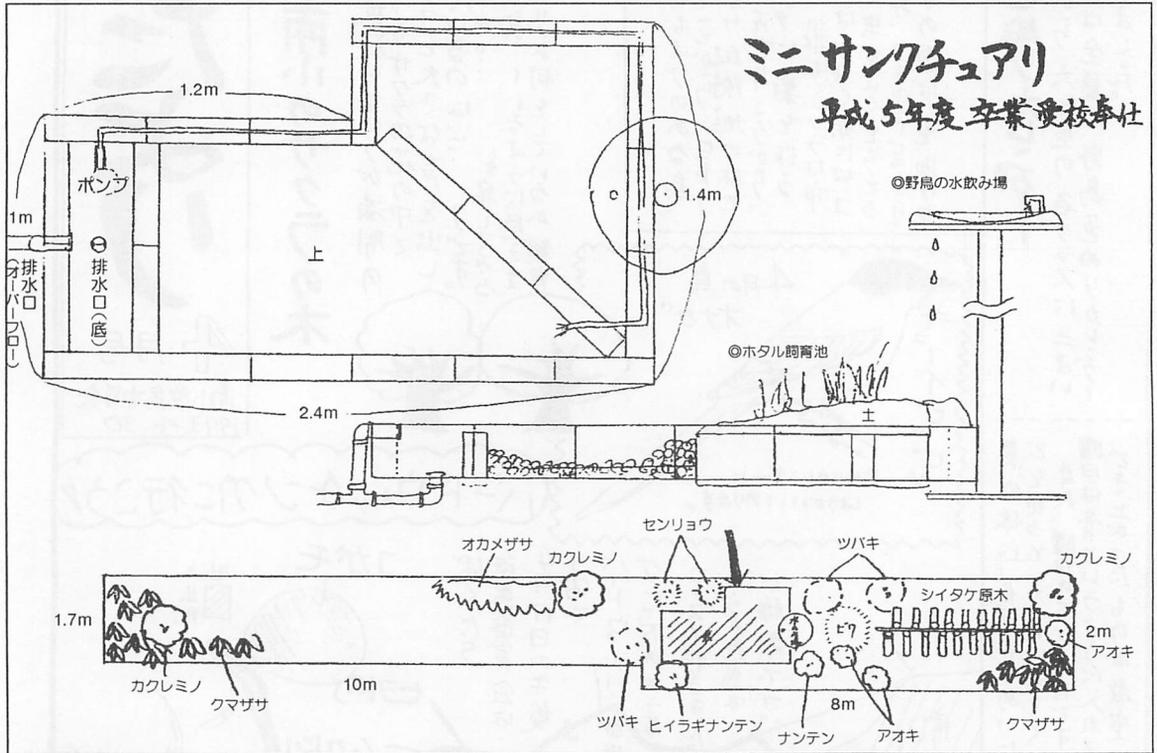
各クラスに餌台を1台配り、給餌活動を行った。

②ミニサンクチュアリ

③実のなる木の植樹

グリーンマークを集め、各学年1本、野鳥が食べる実のなる木を植えた。

1年 ピラカンサ、2年 センリョウ、3年 カキ、4年 ムラサキシキブ、5年 ナンテン、6年 ガマズミ



【知る活動】

①愛鳥マップづくり

近所で見かけた野鳥の名前を地図に記し、学年毎にどのあたりでどんな鳥が観察できるか調べた。

②鳥類の分布調査 (10分間探鳥)

③ツバメの巣調査

学年・学級の取り組みとして、3年生で行った。

④鳥の巣づくり

学年・学級の取り組みとして、3年生で行った。

⑤水質調査

学区11カ所の環境を調べるために、水質検査とその地点の野鳥調査を行った。南地区はホテルを守るという活動も盛んであるので、湧水のある地点も

その中に含めた。水質調査は、バックテストで行った。

湧水地点では水質はきれいであるが、川はやや汚れているという結果が得られた。また、観察できる鳥を環境のものさしにあてはめると、学区の中でも環境の違いが明らかになってきた。この結果は野鳥だよりで知らせた。

4 おわりに

餌台にくるヒヨドリやスズメを見て、児童・教師ともに心をときめかしたり、じっと息を飲んで見入ったり、野鳥に対する興味・関心が少しずつ高まってきたようである。

	A 小幡川			B 荒井池水			C 栗野沢			D 弘法清水			E 新徳寺			F 西光寺			G 峰橋			H 合渡河川			I 白笹河川			J 新町水渠			K 合流水渠			L 青小		
	8月	9月	11月	8月	9月	11月	8月	9月	11月	8月	9月	11月	8月	9月	11月	8月	9月	11月	8月	9月	11月	8月	9月	11月	8月	9月	11月	8月	9月	11月	8月	9月	11月	8月	9月	11月
1 チュウサギ			1																																	
2 コサギ	1			1						3																										
3 コガモ																							2													
4 コジュケイ																								6												
5 キジバト	2	1		6	2	2	1	2	1	2	3	1	6	1	3	2	6	2	1	4		3	1	4	1	1	2	1	2	1	1					
6 ドバト		1	1	1			2	1	2	7	5	3	6	1	5	2	1	2				2	2	5	3	2	4	1	2	5	8					
7 ヒメアマツバメ																																4				
8 ツバメ	5						2	1																							1	2				
9 イワツバメ																															8	4				
10 キセキレイ																															2	1	1			
11 ハクセキレイ			1	1																																
12 セグロセキレイ	2				2	1		3	1	1																										
13 ヒヨドリ	2	2			1	1		2	1	2	5	3	1	2	5	4	9	3	3				1	2	2	1	3	5	9	1	1	1				
14 モズ			1	1																																
15 ジョウビタキ																																				
16 ツグミ						1	1																													
17 ウグイス																1																				
18 シジュウカラ								2	1			1																			1	1				
19 メジロ																2																				
20 ホオジロ						3	4																									1				
21 アオジ																1																1				
22 カシラダカ							8																									10				
23 カワラヒワ	4				3	3																										3				
24 スズメ	1	1	3	1	2	10	2	2	8	2					1	1	2															1				
25 ムクドリ	2	1		4	2	1	4	7	8	2					4	2																				
26 ハシボソガラス	5	1	1	1	3	1	1								2	3																				
27 ハシブトガラス						1	2		3																											

	A 小幡川	B 荒井池水	C 栗野沢	D 弘法清水	E 新徳寺	F 西光寺	G 峰橋	H 合渡河川	I 白笹河川	J 白笹池水	K 新町水渠	L 合流水渠	M 青小
5月	時刻 12:20	12:50	12:58	13:10	13:16	14:25	14:12	18:27	14:00	13:59	14:50	13:35	13:45
気温	16℃	17℃	19℃	15.5℃	15℃	17℃	18.5℃	21.5℃	17℃	15℃	21℃	18℃	17.5℃
湿度	0	0.06	0.5	0	0	0.8	0.2	0.7	0.2	0.02	1	0.5	0.6
日COD	0	0	3	0	0	4	20	2	3	0	15	1	2
8月	時刻 15:50	16:04	16:18	16:34	16:43	14:47	15:10	17:05	13:32	13:27	17:42	16:58	17:2
気温	27℃	28.2℃	29.7℃	28℃	27℃	30.5℃	32.5℃	27℃	27.5℃	27.5℃	27℃	29℃	28.5℃
湿度	17.1℃	18℃	21℃	16.5℃	18.1℃	24.5℃	24.5℃	22.5℃	18.7℃	17.2℃	28℃	29.5℃	19℃
日COD	0	0	0.07	0	0	0.2	1	0.2	0.2	0.02	9	1	0.3
9月	時刻 13:57	14:15	14:28	14:41	14:54			15:19	16:04	16:14	15:42	15:09	
気温	32.2℃	30℃	30.4℃	31.5℃	29.5℃			30℃	27℃	27℃	30.5℃	30℃	
湿度	18℃	19℃	20℃	11℃	11℃			20.8℃	21℃	12℃	21℃	21℃	
日COD	0.02	0.02	0.05	0.02	0.02			0.2	0.5	0.02	0.4	1	
11月	時刻 14:25	14:34	14:46	14:58	15:07	12:56	13:06	15:21	13:24	13:20	15:56	13:25	15:40
気温	21.5℃	20℃	21.5℃	23℃	21.3℃	21.8℃	23.8℃	21.5℃	21.5℃	21.5℃	19.5℃	21℃	21℃
湿度	16.9℃	16.5℃	17℃	16.1℃	16℃	15℃	16.5℃	17℃	15.8℃	15.8℃	16℃	16℃	16.8℃
日COD	0	0	0.2	0	0	0.2	1	0.2	0.2	0	0.1	0.2	0.4
1月	時刻 13:10	13:30	13:48	14:02	14:15	14:32	14:30	14:38	15:15	15:10	14:47	14:30	14:53
気温	8℃	7℃	5℃	6℃	7℃	12℃	5℃	7.5℃	7℃	7.5℃	7℃	7℃	7℃
湿度	16℃	15℃	14℃	16℃	16℃	4℃	9.5℃	12.5℃	10℃	14℃	9.5℃	12℃	15℃
日COD	0	0	0.1	0	0	0.3	0.7	0.5	0.2	0	0.5	0.6	0.5
3月	時刻 13:15	13:26	13:40	13:52	14:02	15:23	15:12	14:19	14:51	14:51	15:18	14:14	14:40
気温	10.5℃	10℃	11℃	12℃	13℃	9.5℃	10℃	10.2℃	11.6℃	14℃	9℃	11℃	11℃
湿度	13℃	13.8℃	14℃	15℃	14.8℃	6.2℃	9℃	13.5℃	11.6℃	14℃	12℃	14.9℃	13.2℃
日COD	0	0	0.2	0	0	0.5	1	0.5	0.8	0.05	1	1	0.5
5月	時刻												
気温	19.4℃	19.0℃	19.5℃	20.1℃	19.6℃	18.5℃	17.8℃	19.2℃	18.9℃	19.5℃	18.6℃	19.6℃	16.9℃
湿度	16.2℃	16.6℃	17.5℃	15.0℃	14.8℃	13.3℃	15.6℃	18.0℃	15.7℃	14.7℃	18.0℃	18.6℃	16.3℃
日COD	0.003	0.013	0.187	0.003	0.003	0.400	0.780	0.383	0.350	0.018	2	0.717	0.46
平均	0.333	4.333	7.167	0.166	1.667	3.8	30	2.167	6.167	4	14	8	5.4

今後、児童自ら進んで野鳥とふれあい、野鳥を通して、少しでも自然とふれあい、そして、自然を

守っていこうとする心が育ってくれればと願っている。

実践講座

# ネイチャーゲームとバードウォッチング

## 組み合わせ実践についての提案

常務理事 杉浦 嘉雄

### ■ネイチャーゲームとは

最近、自然教育や環境教育の分野で「ネイチャーゲーム」が注目されている。

「ネイチャーゲーム」とは、1979年アメリカのナチュラリスト、J. コーネル氏によって考案されたもので、自然環境をゲームを通して楽しみながら体験し学ぶプログラムの一つである。

ネイチャーゲームは、現在64種類のゲームがあり、それぞれが人と人・人と自然に関する教育効果に基づき、次の4段階に整理されている。また、これは、ネイチャーゲームによる“自然への気づき”のフローラーニング(=流れ)の各段階にあたる。

第1段階：熱意をよびおこす

第2段階：感覚をとぎすます

第3段階：自然を直接体験する

第4段階：感動をわかちあう

どのゲームも、自然に関する特別な知識がなくても、自分の感覚を通して自然を楽しめるのが特徴である。また、五感を通して身近な自然を感じることができるため、子どもと大人が一緒になって自然をわかちあうことができる新しい教育手法ともいえる。

さて本来、鳥たちとの出会いやさまざまな発見、気づきを目的としたバードウォッチングも、前述の4段階を全て経て“自然への気づき”を深める活動といえる。

しかし実際は、識別にこだわりすぎたり、また、身近な野鳥の生活についての関心よりも、できるかぎり珍しい野鳥のみの確認に興味をいだく、いわゆる“鳥マニア”のバードウォッチャーが、極めて多いのではないだろうか。

例えば、愛鳥モデル校の核になる児童・生徒が“鳥マニア”であるばかりに、かえって一般の子どもたちに興味関心が広まらないなど、特に学校教育に愛鳥活動を導入する場合には、このようなバードウォッチングの現状が問題となっている。

その問題解決の1つの方法として、筆者は、ネイチャーゲームとバードウォッチングとを組み合わせたい。

### ■「カモフラージュ」

雑木林などでバードウォッチングをする前に、その準備体操にあたる活動として、ネイチャーゲームの1つ「カモフラージュ」(その概要は後述するが、詳しくは「降旗信一著『親子で楽しむネイチャーゲーム』善文社、1200円」を参照)を実践した場合を簡単に報告する。

小学生低学年から学生、社会人にいたるまでのほぼ同年令のグループや親子グループを対象にした上記の組み合わせを約10回ほど実践してきたが、経験的には、おしなべてバードウォッチングの集中度が増した手応えを感じた。

例えば、小学校低学年の子どもたちが、冬の雑木林を移動するカラの混群を、まるで「宝物探し」や「隠れた忍者探し」をするかのように、単なる観察という客観的方法を超えて、自分もその遊びの「一員」になっているような興奮や集中している様子が比較的頻繁に観察できた。

### ■「音いくつ」

さえずりが美しい頃、バードウォッチングをする前に、その準備体操にあたる活動として、ネイチャーゲームの1つ「音いくつ」(その概要は後述するが、詳しくは「日本ナチュラリスト協会訳『ネイチャーゲーム1』柏書房、1350円」を参照)を実践した場合を簡単に報告する。

小学生高学年から学生、社会人にいたるまでのほぼ同年令のグループを対象にした上記の組み合わせを約10回ほど実践してきたが、経験的には、鳥のさえずりはもちろんのこと地鳴きから虫の羽音までの参加者の耳の集中度が増した手応えを感じた。

例えば、小学生高学年の子どもたちが、夏の富士山麓山中湖の森に、まるで自分たちの耳を特殊アンテナであるかのようにして、美しく特徴のあるオオルリのさえずりはもちろんのこと、比較的地味で単調なアカハラさえずりやヒヨドリのグゼリの微妙な違いにも、かなり集中している様子が比較的頻繁に観察できた。

## ■ネイチャーゲームとバードウォッチングとの組み合わせ

ネイチャーゲーム関係の文献によると、『カモフラージュ』『音いくつ』ともに、「第2段階：感覚をとぎすます」のに相応しいネイチャーゲームとされているが、学校のクラスやクラブたちの子どもを対象にするには、第1段階のネイチャーゲームをしなくても、好奇心を刺激するちょっとした呼び掛けやバードウォッチングのフィールドに移動する楽しい時間で「第1段階：熱意をよびおこす」が、自ずと達成されていることが多いようだ。

したがって、筆者自身は、第2段階のネイチャーゲームを、バードウォッチングの導入として位置付け、第3段階・第4段階を目指したバードウォッチングの組み合わせ実践をすることを提案したい。

筆者自身は、バードウォッチングとの組み合わせは、今のところ、この提案どおりの実践しかしていないが、会員の方は、いかなる感想をお持ちであろうか。

「やはり、第1段階のネイチャーゲームをした方が、より効果的では」という意見から、「バードウォッチングのみならず、さまざまな愛鳥活動とネイチャーゲームとの組み合わせ」の提案や実践報告まで、『愛鳥教育』に投稿されることを期待している。

### 『カモフラージュ』の手順（要約）

『カモフラージュ』は、林などの道などに沿って行く比較的大人数でもできるネイチャーゲーム。

手順は、以下のとおりである。

#### ①ロープ張りと人工物のセット

まず、林のやぶと道との境に沿って20メートルほどのロープを張る。次に10～20個ぐらいの『人工物』を適当な間隔を置いてロープのやぶ側に置く。

（『人工物』とは、要するに人が作ったもので、自然物以外なら何でもよい。文房具・ぬいぐるみ・洗濯バサミなどがよく使われる。）置き方は、ただ置くだけでなく、木にぶら下げたり、巻きつけたりなどの工夫はするが、しっかりと見れば確実に発見できるようにすることが原則。

#### ②ルールの確認

準備ができたなら、子どもたちをロープのスタート地点から10メートルほど手前に連れてきて一列に並ばせ、リーダーが「この先の向こうに人工の物がいくつか置いてあります。必ずこちらから見えるところに置いてありますので、ロープに沿って注意深

く……」というような口調で、次のルールを確認する。

- ・参加者は、1人ずつ人工物がいくつ置いてあるかをおしゃべりせずに数え、ロープの最後、すなわちゴール地点より少し離れたところにいるリーダーに、各人が確認した“人工物の数”をこっそりと耳うちすること。
- ・一列に並んでいる先頭の参加者から順に、ほぼ等間隔に出発すること。
- ・ロープのなかに入ったり、置いてあるものにさわったりしないこと。
- ・走らずにゆっくりと歩きながら注意深く探すこと。

#### ③人工物探し

いよいよ『カモフラージュ』本番のゲーム。参加者は、前述したルールにしたがって人工物の数を数え、リーダーにその数を他の参加者に聞こえぬようにこっそりと耳打ちする。リーダーに「まだ、あるよ。」といわれたら、もう一度スタート地点に戻って再挑戦。

#### ④答え合わせ

参加者全員が2回ずつ探し終わったら答え合わせをする。リーダーがスタート地点からゴール地点に向かってロープに沿ってゆっくり歩き、人工物を確認しながらその数を数える。最後の人工物を確認し、その数が答えとなる。しかし、答えそのものよりも、それまでの参加者とのわかちあいが大切。

### 『音いくつ』の手順（要約）

『音いくつ』は、自然豊かな森や草原から都市公園まで、どこでも仕掛けなしにすぐにできるネイチャーゲーム。手順は、以下のとおりである。

#### ①耳のアンテナの準備

参加者は、リーダーを囲んだり、あるいは、各人が仰向けに寝転んだりして、両手を挙げて目を軽く閉じる。

#### ②耳のアンテナの音あつまめ

例えば1分間、参加者各人がまわりの音にじっと耳をすませ、どんな音が聞こえたか、その数を指で折りながら確認する。（例えば、ある鳥の音が聞こえたら一つ指を折り、さらに違った音あるいは違った鳥の音がしたらまた次の指を折る。）

#### ③わかちあい

1分間の後、参加者が気づいた自然の音や静寂などを、リーダーが無理なく聞き出し、参加者全員とわかちあう。

愛鳥活動のヒント

## 自然教材の工夫 スライドボックス

常務理事 渥美 守久

### ① 利用目的

愛鳥モデル校として自然に親しみ学ぶ機会が多かったので、四季折々の自然事象をスライドに収めてきたが、1000コマほどになった。今までにこのスライドを、現職教育を始めとして、生活科、理科、自然愛護集会、野生生物保護実績発表大会などの場面で、教材や資料として使用してきたが、宝の持ち腐れにならないような、別の生かし方はないものかと常々考えていた。

そこで、各地の展覧会などで見たものを参考にしながら、日曜大工程度の簡単な工作で作ることができる「スライドのぞき箱」仮称「スライドボックス」を工夫してみた。

勤務先の蒲郡市立西浦小学校では、空いた教室を改造して、ネイチャールーム（子どもたち手作りの自然博物館）として活用している。製作した「スライドボックス」をネイチャールームの施設の一つとして常設したところ、子どもたちに人気のコーナーとなった。そこで、この場がさらに科学的で創造的な楽しい場となるよう、スライドの交換は子供たちにまかせることにした。子どもたち自らが環境づくりをして、自然に親しめるように配慮したつもりである。

### ② 利用の方法

- (1) 児童会の自然愛護委員会に、ネイチャールームと共に管理運営に当たらせる。
- (2) 廊下に常設する。（スイッチ一つで操作でき、低学年でも扱える。）
- (3) 教室などでも使えるよう、運搬しやすい大きさにした。（児童1～2人で運搬できる。一度に3人がのぞける。）
- (4) 問題解決学習での確かめに、教師が必要な場面で効果的に活用することができる。

### ③ 作り方（板の厚さを1cmとした場合）

見取り図を参照。寸法の単位はcm。

#### (1) 上箱（ふたの部分）

縦×横×高さ＝132×18×15

10円玉ほどの「のぞき穴」を5箇所開け、ふたの裏に虫めがねを取り付ける。下箱にかぶせて使用するが、「のぞき穴」からスライドをのぞいた時、ピン트가合う位置で固定されなければならない。そのため、内側に細い角材をのりづけする。

#### (2) スライドをのせる板（ベニヤ板）

縦×横＝130×16

上箱の「のぞき穴」に合わせて、35mmスライドのフィルムと同じ大きさの四角い穴を開ける。そこにスライドファイル（半透明プラスチック製）を切ったものを張り付け、スライドだけの取り替えができるようにする。

#### (3) 下箱（受け皿の部分）

縦×横×高さ＝130×16×15

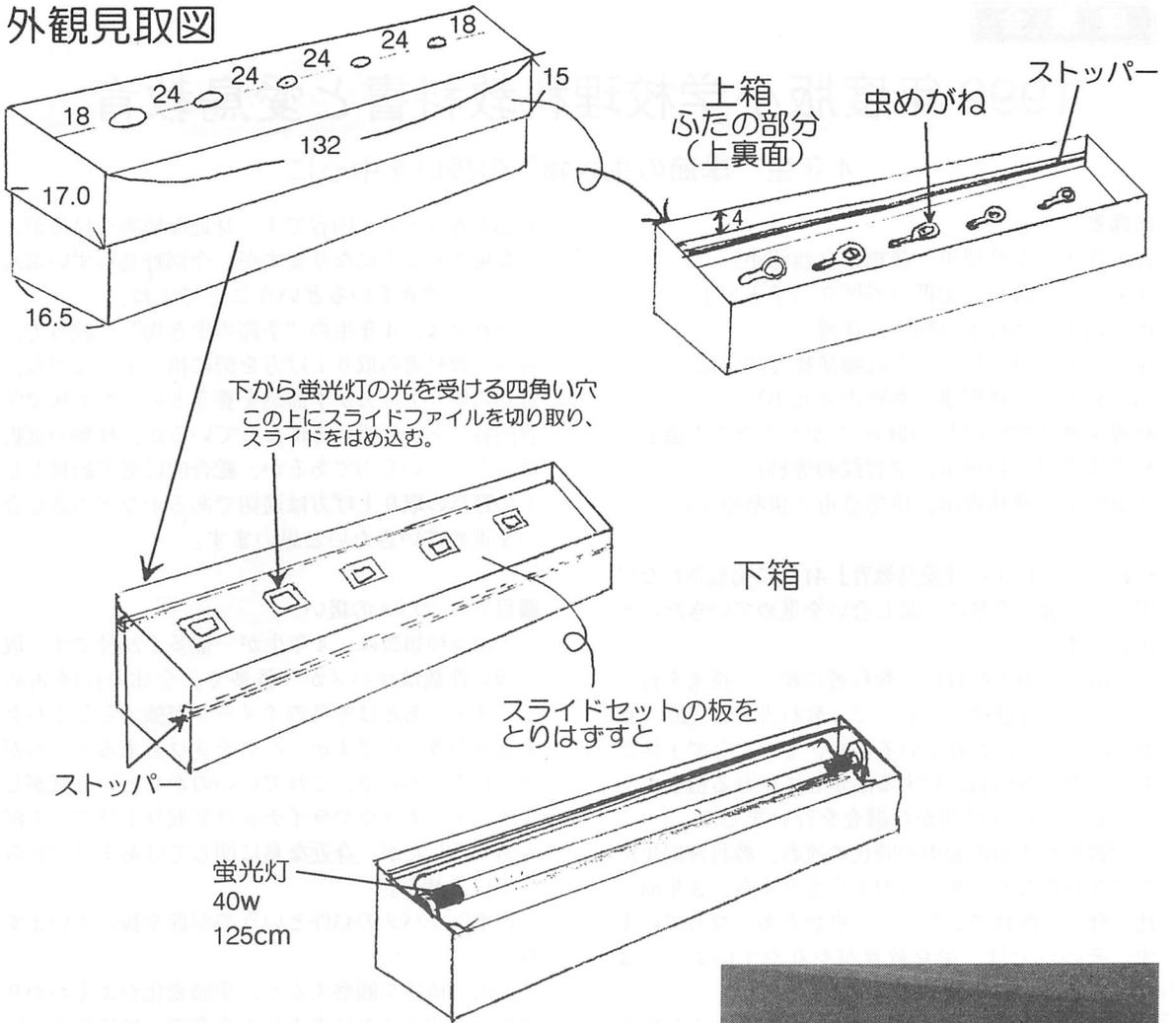
底の部分に40wの蛍光灯を上向きに取り付け、スライドを照らす光源にする。適当な位置にスイッチを取り付け、適当な長さのソケット付きACコードを配線する。

(4) (3)の上にスライドをセットした(2)をのせ、さらに(1)をのせればできあがり。

### ④ 維持管理

スライドは、野鳥、草木、花、虫、愛鳥活動風景の分野別に、ネイチャールームの棚のスライドファイルに整理されている。スライドボックスに展示したスライドは、係の児童が、毎朝、季節に合わせて、意図的に内容を決めたりして、取り替えている。

外観見取図



座談会

# 1992年度版小学校理科教科書と愛鳥教育

## 4年生“季節の生き物”の扱いを中心に

### 出席者

渥美守久（常務理事、蒲郡市立西浦小）  
江袋島吉（会長、元世田谷区立二子玉川小）  
岡本嶺子（財）日本鳥類保護連盟）  
金井郁夫（副会長、日本動物植物専門学院）  
島田利子（常務理事、秦野市立北小）  
杉浦嘉雄（常務理事、（財）せたがやトラスト協会）  
杉田優児（常務理事、学習院初等科）  
平田寛重（常務理事、伊勢原市立伊勢原小）

<杉田>これから『愛鳥教育』41号に掲載された平田先生の論文を基に、話し合いを進めていきたいと思ひます。

<平田>現場の教員は、教科書に頼って授業を行っているのが普通です。そこで、教科書で、実際、鳥がどのくらい扱われているのか、そのことで子供たちにどのくらい鳥に対する話がしてやれる機会があるのか、という疑問から調査を行いました。

学習指導要領の変更や時代の流れ、教科書編集にたずさわる人々の考え方の変化などから、3年前と比べ野鳥が教科書に出てくる点数が多くなっています。その点では、愛鳥教育がやりやすいようにはなっていると思ひます。

学習指導要領できちんと書かれている4年生の“季節の生き物”と6年生の“環境教育”の部分に関して一番鳥が出てくる可能性が高いのですが、実際にそうなっていることがわかりました。

身近な鳥の代表としては、ツバメが一番多く出てきています。しかしそれはただ出てきているというだけで、その内容からどんな事を学ぶのかということについては漠然としていますし、知識として頭に入れるという感じがうかがわれます。どの教科書でも、フィールドに出て野鳥を観察をし、自然の観察をするという姿勢ではないようです。1・2の教科書で、新聞作りとか自由研究などの形で、実際のフィールドワークを活かす例の紹介があったにすぎません。

<杉田>4年生の“季節の生き物”は、1年間を通して生き物の生活の変化を追いながら、理料的な季

節感を養うという内容です。身近な植物や昆虫がよく登場することになりますが、今回野鳥もずいぶん入り込んできているということですね。

それでは、4年生の“季節の生き物”に絞って、各社の教科書の取り上げ方を例に拾い上げながら、野鳥の取り上げ方が季節感を養うといった意味で学習内容にあった扱い方になっているか、種類の選択はふさわしいものであるか、総合的に見て教材としての野鳥の取り上げ方は適切であるかなどの話し合いを進めていきたいと思ひます。

### ■目立つツバメの扱い

<平田>種類数は、4年生が一番多く26種です。取り扱い件数はツバメが一番多く、全体の1/3を占めています。あとは冬鳥のイメージが強いらしくハクチョウが多いのですが、ハクチョウも来るところが限られているので、これでいいのかなという気がします。タンチョウやライチョウを取り上げている例もありましたが、身近な鳥に関してはあまり触られていません。

<岡本>ツバメの43件というのが群を抜いていますね。

<島田>植物を観察すると、季節変化がよくわかります。ツバメは春に来てヒナを育て、秋に渡るという変化がはっきりしています。また、比較的に見やすい場所で観察できます。

<金井>ツバメは害がないんですよね。子供とツバメの調査をしても、嫌がられることはありませんでした。物語に使われることも多いですし、子供達から見ればスズメよりもずっとスマートでかっこいいですからね。餌がなくなるころには渡ってしまい、春になると出てきて、春告げ鳥の一つとして文学や唄にもたくさん使われています。

<杉浦>全国的に分布しているのもいい点ですね。

<杉田>実際のツバメの扱われ方を見ていくことにしましょう。

<平田>学研の巻末に1年間のツバメの様子まとめられているのですが、よくわかりません。

<金井>南の国からやってくるツバメの群れという

写真がありますが、ちょっと考えられませんね。帰る時には見られるかもしれませんが。

<平田>扱い方としては、親が餌を持ってきてかわいいという話で終わりがちです。しかし、何を食べているのだろう、どうやって餌を取っているのだろう、地面に降りている時があまりないのはなぜだろうとかいうところまで踏み込めば、鳥の暮らしや行動について、より深く理解させることができるのですが、あたりさわりのない記述にとどまっているようです。

<杉田>囲みの資料は一見丁寧ですが、あくまでも資料にすぎず、授業で具体的に扱われない可能性もあります。

<平田>実際に授業で扱うのは難しいです。校地内に巣でも作ってくれば別ですが、外まで行って観察をするというところまでなかなかいきません。

<金井>身近に見られる鳥だけに、巣の数を数えるだけで数学にも応用できると思いますね。例えば何kmに巣が幾つあるとかかは、簡単な算数で割り出せます。怠け者の先生でも、生徒に場所とか幾つあったかを調べさせればよいのです。地図で調べたり、歩いて歩幅で調べたりすれば算数にもつなげられ、少し頭を働かせれば応用ができますよ。糞とか孵化した卵の殻とかを見つけられれば生徒達は拾ってくるから、それをもらって他の生徒達に見せれば、また別の感激が得られるはずですよ。そして、拾ってきたものに関してはできるだけ丁寧に扱うようにすると、他の鳥や卵に対しても、別の関心が生まれてくると思います。

<杉田>そういう実践は、教科書の指導書に載っていませんし、結果的に、授業とは別の所で用意しなければできませんね。

<江袋>確かに資料だけでは、観察でなく鑑賞で終わってしまいますね。

<平田>虫を捕ってきて水槽に入れて観察するのは簡単にできますが、野鳥に関してはそういったことができないものだから、やはり話とかビデオを見るところで終わってしまうのでしょうか。

<金井>スズメにしろツバメにしろ、観察困難な野鳥を調べるにはどんな方法があるか、教科書に実例を載せてくれるといいですね。

<渥美>ツバメが身近であるからといって、入り口だけに使われると“愛鳥教育”にまで発展しないのではないのでしょうか。ツバメは手軽に繁殖が確かめられますが、同じく身近なスズメなどは穴の中に

入ってしまうから、そう簡単には見られません。身近なツバメをさわりぐらいにしか見ていないような気がしますね。

<島田>全般的に、ツバメがやって来るところ、卵からヒナになっているところは載っていますが、巣作りの部分が抜けていますね。ツバメが一生懸命に泥をつけていく様子を見させたことがありますが、30分以上誰もしゃべらず、じっと観察しました。授業としてぜひ取り上げたい場面です。

<江袋>鳥の行動に目を向けさせることの大切さでもありますね。

<金井>この場合、教員が少し気を使って、ツバメが巣に何回来たかを数えておくといいですね。教員が一緒になって眺めているだけではその後の発展性がなくなってしまいます。理科の授業であるということを考えて、多少でもデータを取るという心掛けが大切ですね。

<渥美>学校という集団の場で扱うというのはなかなか難しいですから、例えば登下校の間に観察するとかして、調べたものを学校で発表するようにすればいいのではないのでしょうか。

<島田>家庭学習として、となりの家のツバメを毎日調べている子供がいます。家に帰れば身近なところでゆとりを持って見られます。

<渥美>そういう隣人とのつきあいから、社会性も育ちますね。

<杉田>神戸の藤池先生の実践では、子供たちの調査活動に対し地域の方が同じように接していただけたらということから、先生方が各地域をお願いして回ったのですね。やがて子供達の熱心さに地域の人々も応えてくれるようになり、次年度は「今年はやらないのですか」と逆に声をかけられるほどになったということです。そうすると、熱心でなかった先生もやらざるをえなくなっていきます。また、子供が熱心に取り組むようになると、先生がデータ集めをしなくても、まとめることが可能になるとのことでした。

<金井>教員が生徒達から集めた情報を1冊のノートに記録しておくといいと思います。これが後につなげていくために重要なのです。生徒にやらせることができれば、なおいいです。

<島田>短冊を用意しておいて、ツバメだけでなく野鳥のいろいろなことを書かせたことがあります。後で読み返しながらか、前にこんなことがあったねという話ことができました。

<金井>基本的に、日付、時間、天候、誰が何処でというものを記録していだけで、ずいぶん後で役立つものです。

とかく、小学校では絵とか感覚的なもの、中学校以上ではデータが主体となっているようですが、これらがうまくミックスできるといいですね。

<杉浦>フィールドノートや短冊という仕掛が見えていると、初めてやる人にとっては入りやすいですよ。

<渥美>ツバメは、全教科的に発展できると思いますね。

<金井>教科書にもこれだけ出てきているとなれば、ツバメのマニュアルを作ってもおもしろいですね。

<杉浦>愛鳥モデル校などでは、ツバメの繁殖地図を作ったり、人との関係を調べたりするような高いレベルの指導がなされています。しかし、そのようなことは条件が揃わなければなかなかできないことです。ですから、もっとレベルの低い所からでも取り組めるようなマニュアルがあればいいと思います。

#### ■ツバメ以外の野鳥の扱い

<杉田>タンチョウやライチョウの扱いについてはどうでしょうか。

<平田>大日本書籍はライチョウで説明していますが、夏と冬で色が違うという理由によるのですが、ただそれだけでは仕方がないと思います。

<江袋>学習指導要領の表現ずばりではあってもね。

<金井>ノウサギだとだいぶ身近になりますが、色が変わるのは北陸から北になるので、教科書で扱うのはどうでしょうね。

<杉浦>有名度からタンチョウやライチョウになるのでしょうか。しかし、膨らませ方がよく分かっている人でないと、扱いは難しいと思います。

<杉田>ライチョウに関しても資料の鑑賞で終わってしまいそうですね。小学校の理科は、見る・聞く・触るといった五感を働かせる活動が基本なのですが。

<杉浦>科学的知識としては正しくても、方法論が学べませんね。

<金井>鳥を使う場合は、鑑賞と観察とがあります。理科の場合は観察だと教員が思えば、鑑賞から観察に持っていくことは可能です。

<杉浦>ツバメで体験的に四季の変化が解っていれば、

巻末に資料としてライチョウがついていても教員も話がやりやすいようにも思いますが。

<平田>しかし、すべての教員がライチョウの変化を実際に見ているわけではありませんからね。

<杉浦>そういった意味では、取り除いた方がよいのでしょうか。

<金井>でも取り除いてしまうと、代わりにそこに入れるものがないと思いますね。目に見えて季節によってガラッと変わるものというのもそうたくさんはないので。こういうものは鑑賞として割り切ってしまうしかないようにも思いますね。

<杉浦>教科書を観察部分と鑑賞部分とに分けるという考え方は大切ですね。

<渥美>ライチョウだけでなく、地域によっては、ユリカモメなんかでも可能ではないでしょうか。

<杉田>地域に応じた教材ということは、植物ではよく言われています。でも従来、植物が主役で、結果的に動物の領域が少なかったと思うのです。動物も積極的に扱っていかないと、生物全般を見て行くことができないと思います。

<平田>ハクチョウの扱いもけっこう多いのです。

<金井>タンチョウと一緒に、分布は関東から先の東北・北海道ですから、見に行かなければ見られません。

<杉田>最近では、テレビでよく扱われています。

<杉浦>疑似体験でもハクチョウだと知っている子供が多いですね。

<平田>やはり絵になるからなのでしょう。

<岡本>物語などにハクチョウはよく出てきますね。

<杉浦>子供達が自然を見る時に、物語的に、また科学的に感じる両方のアンテナが必要であるように思います。そういう意味では、ハクチョウやタンチョウは物語としては入りやすいが、実体験を得ることが難しいとなれば科学的には支障があります。

<渥美>子供達は、ハクチョウを冬の使者としてイメージしているのだと思います。ハクチョウをどうこうするというのではなく、冬を考えるきっかけなのではないかな。

<平田>やはり学習するならカモを持ってくるべきだと思います。

<杉田>バードウォッチングを始める時、対象は冬の水鳥がよいと言われますね。ただ、教科書の扱いとしては、カモのランクは低いですね。マガモは多いようですが。

<金井>冬の水鳥として扱うのはいいでしょう。シンボルとしてハクチョウがいて、一般的にカモがいて、その中間に最近流行のユリカモメというのを繰り入れながら、冬の水鳥とするのがいいかもしれません。自分が知らないと教員は敬遠しがちですから。

<渥美>カモは分布が広いから、ハクチョウと違って全国的に扱えますね。

<平田>冬鳥ということでツグミとジョウビタキが出ているのですが、教材としての扱いは難しいようにも思います。ツバメと違って誘致する必要があるし、誘致した環境が自然なのかというとそれも難しいからです。

<杉田>ツバメを扱う時、子供達の目はまずツバメそのものに向いていきますし、ツバメ以外の生物に対する広がりはその後にやってきます。一つのことを徹底的に学習することで他の生物への認識の広がりが得られるというのであれば、それを取り上げることは大切だと思いますね。ツバメのように簡単に観察できなくても、ツグミやジョウビタキを誘致することにも意味があるように思います。

<杉浦>誘致場所をちゃんと作るのであればツバメ的な距離になるのはわかります。しかしそういうことが目的ではないというのわかります。ツバメで養った目を広げていこうという時、子供達自身に誘致施設を作らせるようにすれば、野鳥を呼びよせるという興味がツバメ以外の野鳥にも向いていきますね。

<平田>でもそういう活動を継続させるのはなかなか難しいことです。ちょうどまく時期に合わなければ作っただけで終りになってしまいます。

#### ■教材園との関連

<杉田>今の話は、教材園に関連する内容ですね。従来の教材園の考え方は植物が主体で、しかも長期にわたるものでなくヒマワリやアサガオを育てるといった一過性のものに終始していることが多いように思います。木を植えて何年にもわたって変化を見て行くというのがありません。

<島田>校庭の一角に雑草園のようなものを作るといふ例はあってもね。

<杉浦>近くに学習できる場所があれば校庭にこだわる必要はないと思います。でも都市部だとなかなかそうはいかないから、そういう時に何か作ると思いますね。

<平田>“公的な施設にもっと緑地があってもいいだろう。もし土地が高く作れないのなら校庭に作って皆で自然ごっこをする。”という考え方もあります。触れたり捕ったりすることも学習だとするのです。

#### ■生活科との関連

<杉田>今のは生活科にも関わる内容ですね。私の学校では、“自然園”と称して校地の一部を樹木や草をそのままに空き地として放置してあります。そして、週1回、低学年の子供達を連れて行って虫や草花を採取するのをよしとしています。自然が大事なのだと思うようになるのは時期的にもっと後だと考えられるので、そこでは大事にしましょうというのはしていません。

<杉浦>私自身の体験では、生物に残虐な扱い方をしている、ある日ふっとその恐さに気づいた時は、やはり小学校2・3年の頃だったような気がします。

<杉田>最近、昆虫を専門としている人達から昆虫採集肯定論が提起され、論議を巻き起こしています。いずれにしても、子供の発達段階を考慮した幅の広い考え方が求められているように思います。鳥に関してはどんなものでしょう。

<杉浦>“原体験”で気をつけたいのは、絶対捕ってはいけないものもあるということです。したがって、場所の選定には気をつけなくてはなりません。鳥に関しては、糞や羽や死骸などを使って確かめる方法がありますね。

<岡本>今の学校では野外授業が減っていませんか。もうちょっと増やせばいいように思うのですが。

<杉浦>野外にそれだけの人数を連れていくのは、なかなか大変なんですよね。

<平田>やはりそこまですることが必要なのかという問題になるようです。単に教員の趣味で行うわけでもありませんから。

鳥たちの街ものがたり—PART 1—

## 都鳥のもうひとつの顔は「白カラス」

常務理事 杉浦 嘉雄  
(助)せたがやトラスト協会 佐々木 晶子

今回の主人公は、「都鳥（みやこどり）」として平安の頃から親しまれているユリカモメです。

冬鳥のなかでも特に美しい鳥といわれているユリカモメ。そのユリカモメの思わぬ裏話が展開されます。

そろそろ寒さが身にしみてくる11月上旬の夕暮に、私は、東京は多摩川の兵庫島公園を土手添いにゆっくりと歩いていました。

目のはしに白いユリカモメの姿が数羽映ったので、私はその時たまたま持っていたお昼のパンの残りを、面白半分川面に放りました。

カラスじゃあるまいし、ユリカモメがまさかそんなものを食べるとは思いませんでしたが、驚いたことに、その群れはもちろんのこと、どこからともなく数十羽のユリカモメの群れが、まるで秋の蚊柱のように集まってきて、見る間にパン屑を食べ尽くすと、また、来たときと同じように瞬く間に河口に向かって飛び去っていきました。

全員いなくなったと思いつけに取られていると、一羽だけのんびりと夕空を眺めているユリカモメが残っていました。

——おい、ユリカモメ君。君はどうして一羽だけ残ってるの？ ケガでもしているの？

【ユリカモメ】

別にそんなことはないけど、夕日がきれいだし、ちょっと一人でいたかったから。

それから、私は女の子なの。間違えないでね。

——ごめんね。じゃあユリカモメさん、夕日を見る者同士のよしみで、あなたたちのこと少し聞いてもいいかな。いつもは、あんまりお話なんてできないから。

【ユリカモメ嬢】

いいわよ。何かしら。

——今、僕はパンをまいたんだけど、まさかあなたたちユリカモメが食べるとは思わなかったんだよ。あなたたちが食べるのは魚だと思っていたからね。こういっては何だけど、意外にがつがつとパンを食べるんだねえ。

【ユリカモメ嬢】

私たちは魚がもちろん大好きで、よく食べるけど、生きていくためには何でも食べるわ。がつがつはちょっと失礼だけど、パンだって立派な食料だもの。

——また、失礼なことを言って、ごめんなさいね。でも、あなたたちユリカモメは平安の頃から、その気品ある姿と美しさで人間に親しまれていたからね、食べる姿も上品かなと思ってたんだ。昔から「都鳥（みやこどり）」って言われていたぐらいだから、垢抜けた印象があるんだよね。

【ユリカモメ嬢】

ええ、この白い姿を「百合（ゆり）」にたとえられるくらいなもの、少し自慢なのよ。

——そうだね、でも現代の図鑑で「ミヤコドリ」って調べると、あなたたちじゃなくて違う鳥が「ミヤコドリ」って紹介されていたんだけど。

【ユリカモメ嬢】

今では、シギチドリの仲間の1種が「ミヤコドリ」という名前になっているの。

でも、昔から古典や和歌で親しまれている「ミヤコドリ」は、全て私たちだと思ってくれて間違いのないよ。

それが証拠に現在の「みやこ」、東京都のシンボルパードも、その名前にちなんで私たちユリカモメなんですもの。

——そうそう、確かにあなたたちは歌にも詠まれていたよね。学校で「名にし負はばいざこととはむ都鳥わが思ふ人はありやなしや（伊勢物語）」っていうのを習ったのを思い出したよ。

## 【ユリカモメ嬢】

「都鳥って言う名前なんだから、都のことがわかるだろう。だったら旅に出ている私に、都にいる私の大切な人が元気がどうか教えておくれ。」っていう歌よね。そんなこと言われてもちょっと困るわ。本当は、私たちはずっと都に住んでいるのではないんだもの。

——へえ、そうなんだ。そういえば、この季節になってから、あなたたちをよく見かけるようになったよね。

## 【ユリカモメ嬢】

ええ、私たちは、春から夏はカムチャツカ半島やベーリング海沿岸の北国で子どもを産み育てて、秋には東南アジアや日本にやってきて冬を越すのよ。

この多摩川でも最初のグループは9月頃からはずなの。でもあなたたち人間が気がつくほど、数が増えるのはちょうど11月の今頃なのね。

そして、冬をここでんびり過ごして、3～4月には、また北国へ帰るっていう生活を繰り返しているの。

——なるほどねえ。じゃあ、「ねっからの都住まい」っていうわけじゃないんだね。そういえば、さっき、あなたたちの仲間が河口の方へ飛んでいったけど、ユリカモメさんたちのねぐらはどこなの？

## 【ユリカモメ嬢】

ねぐらは東京湾なんだけど、その詳しい場所は秘密よ。ゆっくり眠りたいものね。そこでぐっすり眠って、朝早くに東京湾から河口へ、そして上流に向かって飛び出すのが私たちの一日の始まりなの。

朝からお昼過ぎにかけては、水面で群れになってその所々で餌を取りながら移動していくの。そして、夕方には、ねぐらの東京湾へ向けて帰っていくの。

もちろん、いろんなグループがいるわ。河口から数十キロメートルも上流の山奥の多摩川まで行って、夕方には、ねぐらの東京湾にもどるグループもあれば、すぐそばの東京都のゴミの埋め立て場の「夢の島」で夕方まで残飯をあさるグループもあるのよ。

——それは何ともすごいね。「夢の島」で残飯あさりをするのはカラスたちだと思っていたけど。

## 【ユリカモメ嬢】

恥ずかしい話になるけど、最近では「夢の島」で残飯をあさる仲間がやたらと増えてきて、昔から「ミヤコドリ」と呼ばれた誇りを忘れない私たちのよう

なユリカモメの悩みの種になっているの。

近頃ではミヤコドリどころか、ゴミのたくさん捨てられた夢の島に群がるユリカモメの姿をみて、人間の一部のグループでは、私たちのことを「白いカラス」と言うものさえいる始末なのよ。

でも、私たちの仲間が白いカラスに成り果ててしまったのには、あなたたち人間にも責任がなくなはないのよ。あなたも最初に私たちがパンをあさった姿に驚いたとってたでしょう。本当は私たちに簡単に餌を与えないで欲しいの。

——僕は別に悪気があったわけではないんだよ。でもあなたたちに餌を与えるのはいけないことなのかな？

## 【ユリカモメ嬢】

ええ、簡単に餌が手に入ると、哀しいことだけど、それに味をしめてしまうユリカモメが増えてしまうの。生きている魚を捕まえるより、ずっと簡単に食べられる人間の残飯を食べるようになるのね。

それに結局のところ、あなたたち人間が与えた餌や捨てた残飯は、やがては川を汚したり生態系を乱したりして、結局は、私たちの本来の食料の魚たちを減らしてしまうのよ。

人間のちょっとした行為が、この多摩川の食う食われるという自然の生態を乱すことになるっていてもいいくらいなの。

——そんなに重大なことだったんだね。ぼく達をよく水面にいる鳥にパン屑をあげたり、食べ残した物を捨てたりするけど。

## 【ユリカモメ嬢】

ええ、本当にそうなの。皮肉に聞こえるかもしれないけど、ゴミあさりをしたり、パン屑をがつがつ食べたりするのは今の「ミヤコドリ」にぴったりの行動と言えるかもしれないわ。

人間の残飯の味をしめた輩を増やさないためにも、この多摩川の自然の営みを壊さないためにも、私たちユリカモメに、餌を与えないでってお願いしたいの。

——わかった、約束するよ。誇りあるあなたたちユリカモメが、いつまでもぼく達日本人にとって美しい都鳥であるように願っているよ。

論 説

# 野生生物保護実績発表大会について思うこと

常務理事 平田 寛重

前回に続き、昨年、視察した野生生物保護実績発表大会について、いくつか考えてみたい。

本大会の名称が「鳥獣保護」から「野生生物保護」に変わり、発表内容についても、昆虫や魚類での実践例が紹介されるようになってきたが、やはり、野鳥での活動がそのほとんどを占めているようである。年間を通して活動ができるということも関係しているのであろう。

トンボやホタルについては、行政や地域を巻き込んだの生息地保護・生息地復元などが活発に行われている。しかし、本大会では、そのような実践例の報告はまだなされていない。やはり、学校教育での展開がメインと考えられているためであろう。

参加団体は、ほとんどが学校であり、小学校が過半数を占め、残りを中・高で分けている。

内容的には、愛鳥活動を通じて、野鳥が生息できるような自然環境を守っていこうとする心を育てていくことがメインであった。また、愛鳥活動を通して、自分たちのフィールドを開発から守っていこうというチャンスに恵まれた学校もあった。

しかしながら、この大会の目的が焦点を絞り切れない内容となっているため、具体的にどのように活動したらよいかははっきり見えてこないという問題が現実としてある。実際の保護活動が優先するのか、保護しようとする人間を育てることが大事なのか？

会の名称からすれば前者であろうが、本来的には、教育的意味を考えて、後者がメインになるべき内容であろう。そう捉えることで、教育・普及活動を主に展開しながら、地域の自然認識を深め、自然・人・社会の在り方を考えた理想的な活動が展開して行くことができるのではないかと考える。

しかし、約30年の伝統を持つ行事でありながら、指導体制が不十分であり、バックアップがきめ細くなされていないというのが現実ではなかろうか。現状がこのまま放置されるのであるなら、今後の進歩発展を期待することはできない。主催者である環境庁並びに日本鳥類保護連盟のしっかりとした取り組みを望みたい。

審査の在り方についても、問題点があるように思われる。まず、実績内容を正確に把握し、的確に評価できる専門家を登用することが望まれる。対象が野生生物であり広範囲であるので、一次審査段階で出された内容に応じて、魚類、両生類、哺乳類、鳥

類、昆虫類といった各分野の専門家に目を通していただく必要があろう。また、自然保護活動や自然保護教育といった面での専門家も必要であろう。現状では、関係各省庁の役人と鳥類関係の専門家の審査に過ぎず、参加団体に対して、公正とは言いがたい面がある。

また、発表内容についての確かな判断を下し、それに似合った賞の授与をすることが検討されるべきであろう。賞の名称についても検討が必要と思われる。今後を期待したい。

この実績発表大会は、1967年に第1回大会が開かれ、以来、今日まで続いている。その間、主催者が林野庁から環境庁に移行されたが、内容的にはあまり進歩が見られず、未だに傷病鳥保護や家禽飼育などをメインに考えている状況もある。それでも、小学校においては、探鳥会等による、原体験を通しての教育・普及・啓蒙活動がメインになってきている。しかし、これについても、この後の段階、すなわち、自然のしくみを学ぶ学習をどう授業に組み込み、どう児童に浸透させていくかということを考える時期にきているように思う。

野外での生物学は、環境教育の根幹を成すものであり、自然とかがわる活動のバックボーンとなるものである。昨今のアウトドアブームの中では、自然の中でのとるべき行動や自然との接し方を知らない人間ばかりが目立ち、4WD車の周辺は、環境破壊とゴミの山のような様相になってしまっている。まさに、これらは自然認識の不足によるものと思われる。これまでの自然学習（屋内だけの生物学）を反省する必要がある。自然からの感動、そして、自然から学んだ知識が一体となって、マナーを育てていくと考えられる。

中・高等学校では、クラブ活動によるものがほとんどである。現状では無理もないが、クラブ活動を核として、学校内、さらには地域への啓蒙・普及活動を活発化していくことも考えられてよい。その際、自然環境保全のための基礎資料作りとしての地道な調査は必須の活動である。それがあつて、郷土の自然認識を育み深めるだけでなく、市民活動と連携することも可能になる。今回の大庭中学は、まさにこの典型的な実践例と言える。

さらには、中・高等学校においても、自然について学ぶ野外生物学がきちんと授業の中で取り扱われることが望まれる。

# 平成5年度 決算報告・事業報告

常務理事 杉田 優児

## 平成5年度 収支決算報告書

平成6年3月31日

(単位:円)

	項 目	決 算 額	備 考
収 入 の 部	会 費	288,000	
	売 上	150,860	
	寄 付 金	7,442	
	受 取 利 息	718	
	連 盟	500,000	
	前期繰越収支差額	721,488	
	収入合計	1,668,508	

	項 目	決 算 額	備 考
支 出 の 部	会誌発行費	179,220	
	通信運搬費	117,643	
	会 議 費	82,150	
	交 際 費	9,060	
	事務消耗品	3,789	
	支払手数料	1,030	
	研 修 会 費	194,946	
	雑 費	3,188	
	連 盟	300,000	
	次期繰越収支差額	777,482	
	支出合計	1,668,508	

現金	18,771円
普通預金 第一勧業銀行	6,190円
普通預金 第一勧業銀行	594,334円
振替貯金 2-92041	4,585円
振替貯金 8-12442	153,602円
計	777,482円

前期繰越金収支差額	721,488円
当期収支差額	55,994円
計	777,482円

次期繰越収支差額	777,482円
----------	----------

上記の通り報告します。

平成6年3月31日

会長 江袋島吉

会計 杉浦嘉雄

監査の結果上記の通り相違ないことを認めます。

監事 渡辺研造

徳竹力男

## 平成5年度 事業報告

### 1. 「愛鳥教育」の発行について

(1) 43号(7月)、44号(2月)の発行

(2) 内容

- ① 愛鳥教育の考え方を再考する意味で論説のコナーを設け、会員の愛鳥教育の参考になるよう掲載した。
- ② 愛鳥教育実践講座を掲載した。
- ③ 愛鳥活動のヒントを掲載した。
- ④ 愛鳥活動の参考になるような情報(書籍、雑誌、イベント、ビデオなどのAVソフト、グッズなど)を掲載した。
- ⑤ 指導者の活動の記録を掲載した。
- ⑥ 環境教育に関する情報を掲載した。

### 2. 総会について

期日: 1992年5月29日(土)

場所: 国立科学博物館附属自然教育園

- ① 1992年度事業報告
- ② 1992年度決算報告
- ③ 1993年度事業計画
- ④ 1993年度予算計画
- ⑤ 講演「都市のなかの自然」「翼を持った種」  
講師 自然教育園主任研究員 矢野 亮 氏
- ⑥ 自然教育園内見学: 矢野 亮 氏案内  
館内展示と特別展示の解説
- ⑦ その他

### 3. 研修会

期 日：93年11月22（月）

場 所：愛知県蒲郡市立西浦小学校

内 容：西浦小学校での愛鳥教育を含めた環境教育の取り組みの紹介、公開授業と研究協議及び講演（環境教育の根本である野外生物の取り組み方について）

### 4. その他の行事・審査会への参加

#### < 指 導 >

(1)第9回子ども鳥博士研修会指導 主催:連盟  
平成5年8月23日（金）～26日（月）  
「三宅島」 東京都三宅島三宅村  
常務理事2名（杉田、長屋）

#### < 審 査 >

(1)第47回愛鳥週間全国野鳥保護のつどい  
平成5年5月10日（日）京都府立丹波自然運動公園  
江袋会長  
(2)愛鳥週間ポスターコンクール及び全国野生生物保護実績発表大会審査会  
平成5年11月2日（金）霞山会館 江袋会長  
(3)全国野生生物保護実績発表大会  
平成5年12月20（月）環境庁合同庁舎講堂  
江袋会長  
(4)愛鳥週間野生生物保護功労者選考会  
平成6年3月18日（金）霞山会館 江袋会長

#### < 参 加 >

(1)神奈川県野生生物保護実績発表大会  
平成4年8月30日（月）環境庁富士箱根伊豆国立公園管理事務所  
江袋会長 金井副会長 常務理事3名(鳥田・杉浦・杉田)  
(2)国会前庭巣箱かけ  
平成6年3月14日（月）金井副会長

## 夏期研修会の御案内

下記の通り、夏期研修会を行います。奮ってご参加ください。

講演を、千葉県行徳野鳥観察舎を舞台に各方面で活躍なさっている蓮尾純子氏をお願いいたしました。千葉県行徳野鳥観察舎の歩みと一般社会教育としての愛鳥教育についてお話しいただく予定です。

なお、同氏のご好意により、当日は、通常は入ることのできない保護区も見学できる予定です。

#### 記

日 時 平成7年8月18日（金）  
10：00～16：00

場 所 千葉県行徳野鳥観察舎  
〒272-01 千葉県市川市福栄4-22-1  
電話 0473-97-9046  
※ 右の案内図をご参照の上、  
直接現地にご集合下さい。

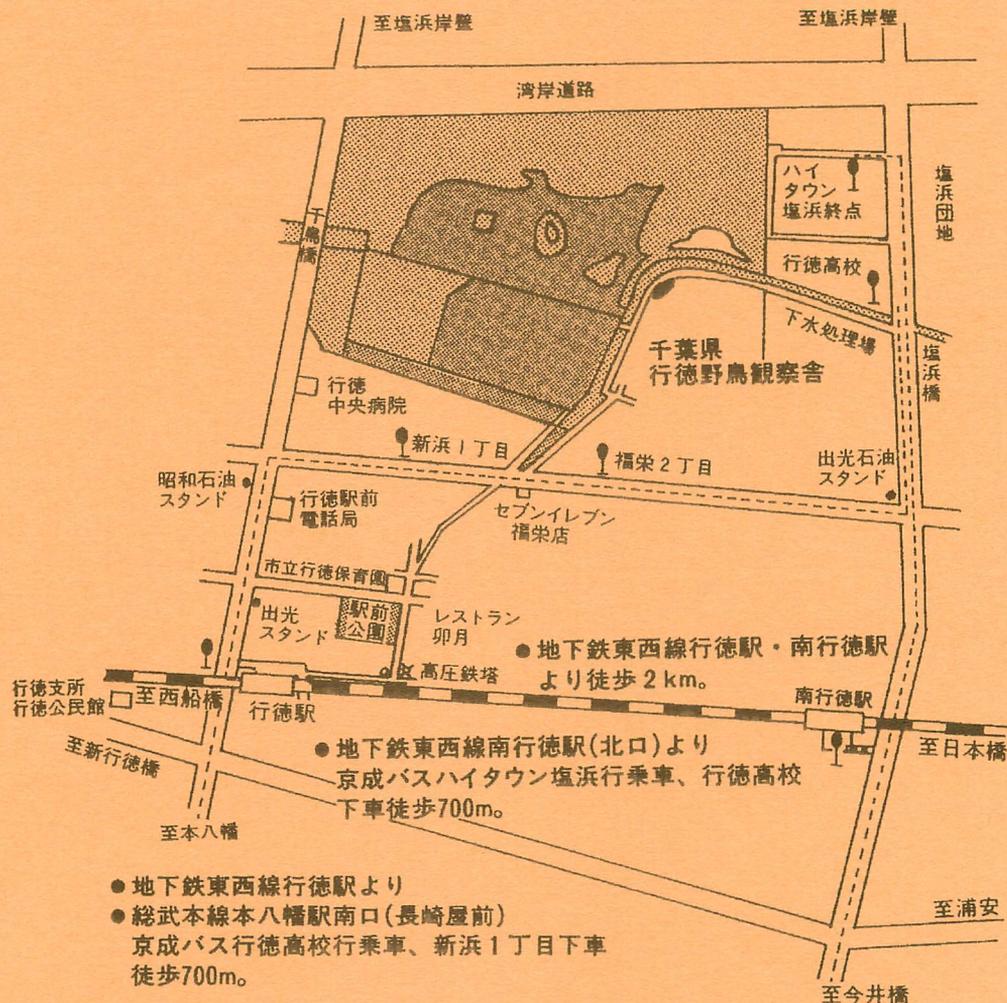
#### 日 程

10:00 施設見学（観察舎と保護区）  
12:00 昼食  
13:00 講演「一般社会教育としての愛鳥教育」  
蓮尾純子氏（千葉県行徳野鳥観察舎）  
14:30 質疑応答  
15:00 懇談会  
16:00 解散

交 通 J R総武線本八幡駅南口（長崎屋前）より  
または、  
地下鉄東西線行徳駅より  
京成バス行徳高校行き乗車、  
新浜1丁目下車、徒歩700m。

持ち物 観察用具、  
弁当（水筒）

※ 野鳥観察舎付近に飲食店はありませんので、必ず弁当をご持参ください。場合によっては、飲料水もお持ちになった方が無難かと思われます。



## 編集後記

諸般の事情から、発行が大幅に遅れ、まことに申し訳ありません。46号をお届けいたします。

次号は、再びツバメの特集号を予定しています。今後、体勢を立て直し、編集発行作業を進めていく予定です。

研修会を8月18日(金)と12月9日(土)に行います。8月は、蓮尾純子氏の講演と行徳野鳥観察舎の見学です。一般社会教育としての愛鳥教育について考えてみたいと思います。12月は、昨年同様、(財)せたがやトラスト協会と合同で探鳥会(1000人バードウォッチング)を開催する予定です。奮ってご参加ください。(杉田)

## 愛鳥教育 No.46

平成7(1995)年5月31日

発行人 江袋島吉  
 発行所 全国愛鳥教育研究会  
 住所 〒162 東京都新宿区弁天町1番地  
 三河屋ビル3F  
 (財)日本鳥類保護連盟内  
 電話 03-3205-7861  
 FAX 03-3205-7863  
 会費 3,000円  
 郵便振替 東京8-12442  
 印刷所 祐文社

## 愛鳥クイズ

### 【前回の解答】

前回は、鳥の名前について考えてみよう、という問題でした。  
下の1. 2. 3. のグループの中で4種類とも本当にいるグループは何番でしょう。

1. アオアシシギ・アオゲラ・アオサギ・アオジ
2. アカアシシギ・アカゲラ・アカサギ・アカジ
3. クロアシシギ・クロゲラ・クロサギ・クロジ

正解は1. です。

参考：高野伸二著「フィールドガイド日本の野鳥」

### 【今回のクイズ】

今回は、♂と♀の不思議について、挑戦してみましょう。

1. 次の中で、正しいものはどれでしょう。
  - ①モズは、♂も♀も高鳴きをする。
  - ②カッコウは、♂も♀も「カッコウ」と鳴く。
  - ③ウグイスは、♂も♀も「ホーホケキョ」と鳴く。
2. 次の中で、♀もさえずる鳥はどれでしょう。
  - ①オオルリ
  - ②コルリ
  - ③ルリビタキ
3. 次の中で、♂が子育てをする鳥はどれでしょう。
  - ①コチドリ
  - ②イソシギ
  - ③タマシギ
4. 次の中で、先に育ったひなが小さなひなの世話をする鳥はどれでしょう。
  - ①コアシサシ
  - ②バン
  - ③カイツブリ